
魔法少女リリカルなのはRewrite

由真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはRewrite

【コード】

N9916Z

【作者名】

由真

【あらすじ】

『転生者、暴れます』

ある日、ひとりの少年が交通事故で死ぬ。

本来はそこで人生は終わりなのだが、どこからともなく現れた女によって転生させられることになる。

命令は、『蒼く澄んだ瞳の少年を探せ』……………。

その訳の分からない命令と僅かなヒント、そして対価に得た超常的な力を手に、少年はこの世界をひた走る。

途方もなく深く黒い交錯、そしてその運命に巻き込まれる二人の少年と魔法少女達。

魔法少女リリカルなのは Rewrite、始まります。

Prologue (前書き)

勢いでプロットから能力まで4時間で決めた。後悔はしてない。

ほかの知らない人とかの見知らぬネタと被っても振り切る覚悟で書いていきます。

……だけど、知ってる作品とは極力被らないようにしないとね……
……。

Prologue

ここは地球。

取り留めて何も無い、我々がよく知る地球。

強いてあるとすれば、昨今から云われる地球温暖化、異常現象などが謳われる。

そんな地球の日本、とある都道府県の郊外の道をひとりの少年が歩いていた。

見た目は至って普通だ。どれを取っても一般的なルックスと身体能力。背は若干低い。

ただ、頭の中身は日本の高校生では最高クラスにある。

「はあ…帰ったらまた勉強なんだろうな。いつたい息子の人生をなんだと思ってるんだ」

少年はぶつくさ言いながら、音楽プレイヤーを片手に街路をひた歩く。

聞いている音楽は『PHANTOM MINDS』。

むしろ、劇場版魔法少女リリカルなのはの曲だ。

そう、彼は所謂オタクと呼ばれる人間である。

親に隠しては、アニメグッズを買い集める範囲で揃えては楽しむ。親は

それを許してないから、見つければ思い切り説教されるし、集めたものはことごとく捨てられた。

その中でも、とある声優が一番好きであった。機会があれば、ライブコンサートにも行きたいと願う程である。

この曲があまりに好きなものだから、これを聞いている時は文字通り何も聞こえなくなる。

……そんな時、悲劇が起きた。

「えっ

」

気付いた時には、トラックが目の前に迫っていた。

「……………」

少年は目を覚ます。

先程まで目の前にあったトラックはいずこへ、あたりは上下左右真っ暗でしかなかった。

しかし、地面にいるという感触はあった。試しに未だに身に付けていた時計を落としてみたら、コツンという音がする。

「くそ……いつたいどこだよ、ここは。まさか死んだんじゃないだろうな」

自分で言ったのにも関わらず、まず死んだだろうなという思いを持っていた。

少年は最後に見えた映像のブレ方から速度を割り出し、見えた感じの仮の質量、予想ブレーキ位置等を考慮した結果、醜い肉の塊になるのは必至だということが分かった。

だからこそ、がくつとうなだれる。

「マジかよ………案外ポツクリ逝くもんなんだな、人間って」

そんなことを言いながら、少年の瞳は絶望には染まっていなかった。実際、生きているほうが地獄だと感じる時期もあったんだ………それなら、別にここで終わってもいい。

「………だけど、願うことなら」

オタクの人間なら、誰もが憧れる二次元。そこで最高の力を得て敵を蹂躪し、女の子に好かれたい。

そんな願望を抱いても、所詮それはエンターテイメント。二次元に行けば、二次元が自分の三次元に昇華されるだけに過ぎない。

……だが、少年はそうしたくて二次元に行ってみたいとは思っていない。

というか、恋愛は正直どうでもいい性格だった。

ただ、生まれ変わるならこの世界よりかは別の世界で生きたい。その程度の願望である。

そして、それを思ったとほぼ同時に、正面の足元に幾何学的な紋様が浮かび上がったかと思うと、そこから人が現れた。

「うわあああああ!!!?!」

少年は慌てて飛びすぎる。

「……そこまで驚くかしら」

魔法陣から現れた人は女性とおぼしき声を発する。

黒いフードを被っており、全容はよくわからないがわずかに見える肌を見る限りでは女性であった。

「いや驚くつて。で……ここは死後の世界であつてるのか？」

「正確には死ぬ直前よ。ほら、よく言うでしょう？死ぬ直前には走馬灯が見えると」

「大してかわらないじゃん」

少年はため息をついた。
それは女にとってはどうでもいいことで、スルーして話を進めはじめる。

「ところで、あなたは願望があるんじゃない？」

「え……」

少年はドキツとする。まさか心の声が聞こえたんじゃないだろうか。

「ふむ。第二の人生を歩みたいのね」

「駄々モレ!？」

少年は嘆いた。しかし、女は待つことをしなかった。

「その願い、叶えてあげる。ただし強制イベント」

「え」

強制イベントという単語にげんなりとしたが、自分のささやかな願望が叶うならまあいいかな……少年はその程度に思っていた。

「まあいいじゃない。見た目や能力はあなたが望むものを差し上げましょう」

「…それがいわゆるチートや厨二設定と呼ばれるものになってるか」「ええ、もちろん」

わずかに心が高鳴る。と、同時になんだかんだで最強に憧れる自分が悲しくなった。

「でもやつぱり強制イベントで」

「結局かい!!」

「ええ。容姿はイケメンで良いわよね？そうね、茶髪で黒く澄んだ瞳でいいかしら。体は……9歳ね」

「待てい、なんで9歳なんだよ」

「対価よ、文句ある？それともこのまま死ぬ？」

「若返りサイコオオイヤツフウイイイイイ!!」

少年はただでさえ生き返れて、さらに能力をくれるというのに出過ぎた真似だと思った。

「そうそう……能力に何か注文は？」

「注文？」

「どうせなら好きな能力は最低限使いたいでしょ」

それもそうだと思う。そう考えた少年は女に軽く耳打ちした。

9

「……なるほど。だけど三つ目の能力については一部改変させてもらうわ。それはベースが悪いと宝の持ち腐れになるから……」

「ああ、構わない」

「なら……決まりね」

女は妖艶に微笑む。

と、そこで少年は女に疑問を投げかけた。

「それで。俺になにをさせたいんだ？転生させてこんな能力まで寄越して」

「……………暇潰し？」

「オオオオイ!!!!」

「さ、いつてらっしゃい」

女は指をパチンと鳴らす。すると奇妙な風の奔流が少年を包み、足元に幾何学的な紋様が現れた。すでに、その能力が付与されていたからか、少年にはそれが転送魔法だということがわかった。

「テメツ、どこ飛ばす気だ！」

「地球よ」

「地球かよ！」

また逆戻りかと、少年は怒鳴る。

「地球といつてもあなたの地球じゃなくてよ」

「はあ!？」

「そこへ行つて、あなたは茶髪で蒼く澄んだ瞳の少年と出会いなさい。大丈夫、変なことしなければ会えるから」

「はあ!？」

「ヒントは、魔法少女、守護騎士、闇の書……そして時空管理局」
少年を包み込む奔流が激しさを増し、ついには少年の体を飲み込んだ。

「大丈夫、失敗したらリプレイ出来るから 頑張れ少年」

「ちょ、待てよおおおおお!!!!」

少年は、そのまま魔力の渦に飲み込まれた。

取り残された女は、上を崇めながら呟いた。

「少年の道に、幸おおからんことを」

ここは時空管理局という組織が管理している世界のひとつ。

あたりはすでに暗く、遠くでは森のさざめきや生物の鳴き声も聞こえる。

その寒気際立つ森の中を、一人の少年と一匹の異形な何かが駆けていた。

「ダアアアッ！！！！」

少年は襲い掛かる敵に気合の一閃を振るう。

その一撃は敵を簡単に切り裂き、敵は血の飛沫をあげる。

しかし、敵の猛攻は止まらない。

「来るなッ来るなアアアア!!!」

絶叫しながら、正確無比な攻撃を叩き込んでいくが、敵は倒れる事を知らない。

さて、この少年の説明をせねばなるまい。

少年は茶髪で寝癖が酷くなったような髪型で、体軀はまだ10歳程度のものであった。身に纏うのは、病院に入院する子供が着るような病院着に似たもの。

そして、少年の手には剣型のデバイスが握られている……と言つても非人格型で且つ、非殺傷設定などという魔導師のデバイスになくてはならないものを備えていない。

実質、合法質量兵器といつても過言ではなかった。

少年は追いつかれては斬り、追いつかれては斬りを繰り返していた。それでも、斬っても斬っても速さは衰えるどころか逆に増しているようにも見えるのだから、子供には行き過ぎたホラー以上の恐怖を与えていた。

「来るなアアアアア!!!」

少年は、振り返り様に自分の限界にまで練り込んだ魔力を蓄えた剣で斬り上げる。

斬り上げた瞬間に、蓄えていた魔力を一気に解放したため魔力爆発

が起きる。

「ハアツ！はあ……ひつぐ……はあ……ぐ……はあ……」

激しい息切れと、8割以上が吹っ飛んだ敵の体を見たときの僅かな安堵からくる涙。

この時の状況は、同年代の子供は元より……大人でも堪え難いものであることには変わりない。

それでも、この10歳の子供は限界が見えていたとは言え耐えきっていた。

しかし。

その安堵は次第に絶望に変わる。

完全にはないが、再起不能なまでに吹き飛ばした。それなのに、どういうわけか敵は完全に再生していた。

「あっ……あっ……あっ……」

急に立ち止まり、胸の早過ぎる鼓動に体もついていけない……体力だつてもう限界を超えている。

早い話、立って剣を構えているのも精一杯なのだ。

助けはこない。逃げてでも逃げられない。
唯一、助かる手立てがあるとすれば…自らの手で敵を倒すしかない。

敵がゆっくり品定めをする。少年は固まっただまま…いや、それでも戦闘体勢ではあった…敵を見据えていた。

ここで、少年の記憶は一旦途切れることになる。

Prologue (後書き)

閲覧ありがとうございます。

現時点では二人の主人公の名前は明かしてません。
一人についてはしばらく後になります。

とりあえず、転生させたほうから書いていきます。
応援していただければ、幸いです。

第1話 選択（前書き）

第1話……短いですが、ご了承ください。

第1話 選択

「う、うぐ………」

俺：舞阪千里は目を覚ました。：オイ、女みたいな名前っつーな。

起き上がって辺りを見渡すと、今までの風景とは別の……とはいえ
今までと大差ない世界が広がっていた。

「あのアマ……次会ったらシバいてやる」

いきなり転生だとかチート能力だとか。意味分からねえぞタコが。
……まあでも能力をくれたのは助かる。転生させて命令をやれでハ
イオシマイだとどうしようもないしな。

とりあえず……くれた能力を確認するか。まずはそれからだ。

俺は手を軽く開いて念じる。

「ゲートオブパピロン
……王の財宝」

すると、長いなにかが輝きを放って現れる。それを握って確認する
と愕然とした。

「……まさか当たり前のように出るなんてな……『アロンダイト
刃毀れを知らぬ剣』」

デュランダル
絶世の名剣と一、二を争う名剣のひとつである刃毀れを知らぬ剣。
女が付与してくれた能力はしっかり起動する。
この分なら、約束エクスカリバーされた勝利の剣もちゃんと入っているだろう。
安心した俺はアロンダイトを戻した。

そして次に必要なのは寢床。なければさすがに死ぬ。

………が、どうしようか。正直なところ（ヒラリ）おっと何かメモ
が。

『仮住居 海鳴市南青山三丁目12-10 謎の美女より』

ちょ、美女で。つかなんてご都合主義。まあ今回はそれに乗っかる
としようか。

俺は住所が示す場所へ向かうことにした。
ナビ？魔法でチヨチヨイのチヨイやで！

ここは示された住所にあったアパート。それなりに綺麗で、なぜか自分の表札もかかっていたので見つけるのはたやすかった。

「うん、ごちそうさま」

カップめんを食した俺は、とりあえず布団の上に寝転がった。

「しかし驚きだな…質素とはいえ生活には困らないようになってるし」

食料も、当面は困らないようになっていた。しかし、どの道自分で稼がなきゃならなくなる。そうなった場合、自分で変身魔法をかけてアルバイトか……。

いや、そんなことを考えるのはよそう。まず考えなければならぬのは…女の発した言葉だ。

ヒントとして、女は魔法少女、闇の書、守護騎士、時空管理局と言った。

そしてこの住所。

「海鳴市……」

生前に貯めたアニメの知識を総動員させて、この単語が関わる作品

を探し出す。

無論、その答えはすぐに出た。

「魔法少女、リリカルなのは」

高町なのはが、魔法を通して仲間と出会い、敵と対峙して己の想いをぶつけ合う熱いアニメ。

「—ことは、今俺はリリカルなのはの世界にいるのか。」

「なんでリリカルなのは？と思ったが、それはどうでもよかった。」

つまり、魔法少女は高町なのは。

となれば、闇の書と守護騎士ってのは八神はやたとシグナム達ヴォルケンリッターだろう。

ここで、現在の時間軸はA'sだと判断した。

そして時空管理局。こいつは…高町なのはが現在進行形で協力している組織だ。そしてこの世界で絶対権力を握る。

そして命令は、『蒼く澄んだ瞳の少年を探せ』。

全部照らし合わせたら、全員と何かしらの関わりを持ってということなんだろう。

関係を持つってのはこれらのキャラと何かしら接点を持ちさえすれば簡単だけど……………。

「問題は、最初に誰の陣営に付くか」

A's においての主な陣営は三つ。

一つ目はなのはら管理局。

二つ目ははやてらヴォルケンス。

三つ目はギル・グレアムのとこだがまずこの選択はない。

原作に忠実になるなら、最初はなのはらが負けるようにするためにはやてらに付くべきなんだが…これから先を考えたら、なのはらに付いた方が人間関係的に有利だ。

…まあ人間関係つかハーレムには興味ないし。なっちまったらなっちまっただ。

それに、なのはとフェイトの最強コンビは自分の能力を試すには絶好の機会かも知れない。

「…明日は図書館行ってみるか」

あそこなら、必ずはやてに会えるはず。
そう決めて俺は寝た。

第2話 行動

次の日。疲れていたからか、昼前後に起きた俺はかるく昼食を済ますと海鳴市の一番大きな図書館を目指していた。

理由は簡単、最初は八神陣営から始めようと思ったから。

え、管理局側なら楽しじゃね？とか思う人もいるけど、それではいきなり原作ブレイクすることになる。それは原作者として正直回避したかった。・・・だけど、回避できる悲劇は回避したいかな。

というわけで、目指す先は八神はやてがよく利用している公立図書館。とにかく、出会ってから勢いでやっていこうと思った。

ちなみに身長は132cmくらい。同学年ではかなりでかいほうだろう。

……まあ、どうせ小さいですよどうせ。

「やて、ここか」

なんだかんだ話していたら、もう図書館が目の前に見えていた。

…分かっていただけ、でかい。

これは…自分が住んでいた街の図書館よりでかいんじゃないか？

「……寒ッ」

思えばA'sは秋が深まる季節。昼時とはいえ、寒くなるのでさっ

さと中に入ることにした。

中に入った俺は、蔵書の量にまたしても驚かされることになる。
専門書や文献はもちろん、童話や最近の雑誌に文学小説、果てには
漫画やラノベまで置いていた。

…漫画に関しては、魔法少女リリカルなのはに関するものは全くな
いということ以外変わりはない。

「うわ…：ほんとになんでもあるな…。こっちにはバカテスに禁書
録に超電磁砲…：ライディーンとか誰が読むんだよ」

とか言いながら読んでしまうのがオタクの性。

元いた世界ではまだ売り出されていなかったものを手当たり次第に
読んでいく。

少年熱読中……

「く……っ、まさかの自己犠牲かよ……泣かせてくれるぜ」

八神はやてに会うことも忘れて、漫画を熟読していた。

ふう、と本を閉じて壁掛け時計を見ると……

「ゲツ、閉館30分前!？」

ヤバイ!本を読むと時間を忘れるというのはよくあるけど尋常じゃないぞ!?

急いで本を閉じて周りを早足で歩き回る。

すると、すでにお目当てのものを手に入れたのか、はやては小さい赤髪で三つ編みの女の子……間違いなくヴィータだな……が図書館から出ていこうとしていた。

見つけるが早し、追い掛ける。ヴィータから自らの魔力を察知されないように、強度の認識阻害魔法をかけてから追い掛ける。これなら、普通に歩いていてもばれることはない。

どうせバレないなら、ちよっと並走してみるか。そう思った俺は、自然な感じではやて達に並ぶ。

「はやて、今日は何借りたんだ？」

ヴィータが車椅子に腰掛けたはやてに問い掛ける。

「ん?今日はちよっとした童話だけやよ、ヘンゼルとグレーデル。」

帰ったらヴィータに読んだげるな」

「ありがとう、はやて」

とても他愛のない、日常的な会話。そうすると……。

「ちょっとお嬢ちゃん。ボク達と遊んでいけないかい？」

「お兄ちゃん達が楽しいこと教えてあげるよ」

えー、なにこのテンプレ展開な感じで、チャライお兄ちゃん達のはやてとヴィータに絡んできた。まあ9歳とはいえ素材がいいしな……って感心してる場合じゃない！

「ほら、行くござッ」

「きゃ」

「おいテメエはやてに気安く触んじ」ロリコンかテメエら……！」って誰だよ……！」

ごめんよヴィータ。こんなロリコンヤンキーには我が秘伝の最終奥義をだすしかないんだよ。

「え、キミこのコのガールフレンド？」

「ヒューカツコイイー（笑）」

ギャハハハと下品な声で笑い出す。

いいぜ……ガキがガキ通りの能力通りだと勘違いするなら、その幻想をフレンドぶち壊す……！！

「で？ボウヤになにか出来るの？」

「みっちゃんやめてやれよ、コイツびびっぎゃあああたたあああ

……！！」

俺の渾身の崩拳を叩き込んでやった。もちろん、手加減ハシテマスヨ？

みっちゃんとやらを吹っ飛ばしたためか、周りのヤンキーが激昂した。

「テメエ！（バキッ）がはっ！！」

「よくもやりやがったな！？（ドカッ）ゴハア！！」

ザコ共が！テメエごときが俺に勝てると思っな！…まああの女のおかげだけさ。

で、助けられたはやてとヴィータは。

「……………」
「……………」

若干引いていた。
当然の反応だ。

「えと……大丈夫？」

「大丈夫やないな……後ろのお兄ちゃんらが」

まあ素手の全力で殴ったしな。少なくとも内出血は免れない。

「オマエ……体に異常があるんじゃないかねえか？」

「大丈夫、昔から体は丈夫なんだ」

「まあなんにせよ、助かったわ。ありがとな？」

「いいえ、どういたしまして」

ぐあ、可愛すぎる。可愛すぎるぞはやて。って待て！断じて俺は口
リコンじゃない！

「えと、良かったら送っていこうか？またあんなのに襲われたらど
うしようもなさそうだし」

「んー……せやな。せつかくやしお願いしよか」

「でもはやて……」

「それにヴィータも公にはやれんやろ？」

公にやれない……無論鉄槌の騎士の力だろうな。あれを使えばあんな
のは簡単に潰せるだろうけど、一般人には使っちゃまずい。もちろ
ん、あえて気にしないことにした。

「せやから。お願いしよ？せつかくかつこええ男の子がボディーガ
ードやつてくれるんやから」

「……分かったよ、はやて」

ヴィータは渋々頷いた。それを見てニッコリと笑ったはやてはこちらを見る。

「ほな、お願いな？えと…」

「舞阪千里。千里でいいよ」

ちなみに苗字は本来の苗字から変えた。昔の苗字は面白くないし…名前を変えなかったのは、やっぱり腐っても親から貰った唯一のもの。愛着はある。

「私は八神はやて。はやてでエエよ。こっちは…」

「ヴィータ」

「じゃあはやてにヴィータ。よろしくな」

こうして、八神家に行くことになった。

第2話 行動（後書き）

はい、第2話でした。

一話一話の短さは、勘弁してください。

駄作ですが、これからも魔法リリカルなのはRewriteをお願いします。

第3話 いや、こんな展開じゃなかったよな（前書き）

実はA'sはおぼろげにしか見てません。

ごめんなさい。

第3話 いや、こんな展開じゃなかったよな

で、俺は八神家のリビングにいる。うーん・・・大丈夫かな・・・。魔力もちばれないかな・・・。主にシグナム姐さんとシヤマルさんに。

「それでなー、この千里くんが格好良く現れてチンピラたちをやっつけたんや!」

こう・・・ばーん!てな・・・と、興奮しながら身振り手振りをつけて、シグナム達に説明するはやて。

よっぽど助けてくれたのがうれしかったんだなと、俺はちょっと嬉しくなる。

「そうなんですか・・・千里くんありがとうございました」

シヤマルは深々とお辞儀をした。

「いえ、僕もちよつと怖かったですけどねー(副音声:余裕過ぎてハナクソが出そうでしたけどねwww)」

「別、こいつが出てこなくてもあたし一人で倒せた」

「もう、ヴィータは意地っぱりさんやな」

「べ、別に・・・」

おーおー。顔赤くして顔そむけちゃって。動揺が見え見えですよ。それを軽く見届けて、はやては車いすを動かす。そしてキツチンに向かいながらこちらに向かって声をかけてくる。

「ほな、夜ご飯作るなー。よかつたら千里くんも食べてってや?」

「い、いいのか？」

「うん、千里くんが良かったら泊まってるっていいんやで？」

いくらなんでも助けただけでそんな優遇されていいんかね？という
か9歳とはいえ男なんだけど。とりあえず、シャマルとシグナムに
視線を送って見る。

「私がかまわないですよ」

「私も、主はやての命ならば」

「なんでだよシグナム。こんな胡散臭いやつ泊めていいのか？」

「主の命を聞けないのか？」

「いや、はやてがいいんならいいんだけどさ……」

そこでヴィータがどもる。少し怪訝に感じたシグナムは顔をしかめ
てヴィータを見つめた。

……やばいな、ヴィータのやつ俺の身体能力疑ってるな。魔法は
使ってないけど、身体強化魔法はばれないように詠唱破棄でかつネ
ギまの『戦いの旋律』メローディア・ペライクスを使っておいたんだが……魔力は魔力って
事か。成分が違ってものにかを使ったのは感じ取れるんだという事
が分かった。

「まあ、なんにしても客人だ。もてなすぞ……ふむ」

「舞阪千里です」

「よろしくな、舞阪」

シグナムはあえて苗字で呼ぶのか……思えばなのは高町、フェ
イトはテストロッサー辺倒だったな。

それはどうでもよくて、その時のシグナムの目が戦士を見るような
目だった。

え、一（物理攻撃的な意味で）襲われるフラグ？

はやてのおいしいご飯をいただいてから、風呂に入りあー疲れた。と、リラックスモードでいた。その間、はやてに質問攻めを食らっていた。

「なあなあ、千里君はこの学校通ってるん？」

「最近引越してきたばかりだから。まだこの学校行くとかは決めてないんだ」

「そうなんや・・・私は体に不自由抱えてるから、学校お休みなんや・・・」

そう言つて、若干憂鬱な顔をするはやて。そばで話をにこやかに聞いていたシャマルはすこし顔を強張らせる。

そりゃ闇の書の副作用だもんな。そんなことをうっかり洩らしたら最後、はやてがどう思つか考えただけで恐ろしいんだろっ。

・・・やべ、フラグ立つようなことはしたくない。でも、言わなきゃなんか可哀想だ・・・。

「大丈夫だよ。治してやるって気持ちをしっかり持ってたら絶対治るから」

「え、でも・・・」

「でも、待ったはなし。なんなら、俺が・・・大きくなったら医者になって治してやるよ」

「あはは・・・ほんなら気長にまたなな」

はやては苦笑いを浮かべる。いかんいかん、口が滑って今すぐ直し

てやるなんか言ったら原作がいつきにおじやんだ。

「くあ……」

「はやてちゃん、眠たいんですか？」

「ん……もう10時なんやな。ほな、私は寝る準備するわぁ……」

ふわぁ……と、かわいらしい欠伸をしながら、はやては車いすを動かしていった。それを介護するためにシャルルが追いかける。

……その時、何かしらの結界が張られた気がした。

この魔力の感じ……シャルルか。離れたと同時に結界が作動する術式を組んだようだ。それに呼応して、騎士服姿のシグナムとヴィータが飛び込んでくる。

「……9歳の子供にいきなり剣を向けてくる騎士がどこにいるのやら」

「悪いな、ここにいる」

と、レヴァンティンの切っ先をのど元に突き付けてきたシグナム。ついでにヴィータもグラーフアイゼンを担いでいる。

「オマエ、はやてを助けるときに魔法使ったろ。それはその辺の身体強化魔法程度のものは言え、アタシ達が見たことない術式だった」
しかもしっかりばれてるし。

「貴様は何者だ？何の目的があつて主ははやてに近づく」

一触即発の雰囲気で接してくるシグナム姐さん。うーん・・・安い嘘は命を失いかねないな。

「あの子を助けるためだ」

「われわれで事足りる」

だろうな。シグナムはそう言う性格のはずだ。

「だけど、それが切羽つまつてるのは事実なんだろう？下手をすれば今年中に死ぬ」

「！・・・それは」

「ここに来て初めての友達になれそうなんだ・・・それに、救える命は救うべきだ」

「・・・信用しろと？」

「信用するかはお前から次第だ」

「アタシは信用しねーな」

「胡散臭いからか？」

「それもある。けどお前にそれをできるだけの力あんのかよ」

ふむ・・・こいつらからしたら未知数の力だもんな。それならちょっとだけ気合入れてみるか。

軽く、魔力を解放する。すると尋常じゃないほどの魔力の奔流を生んだ。

ちなみに俺は・・・膨大な魔術回路にネギ親子ですら到底適わない魔力、そして世界最高峰のリンカーコアを有している。こんだけありゃあ信用を勝ち取るだけの魔力は十分すぎるだろ？

「これは・・・」

「どうだ？こんだけありゃいけるだろ。なんなら、魔力を闇の書に食わせてやるよ」

「・・・そこまでして貴様にメリットはあるのか？いくら主を思っ
ての行動とはいえ・・・」

「俺ははやてを救えたら十分だ」

シグナムはしばし考え込む。その未出した結論は。

「・・・わかった。貴様がいいというのなら、協力してもらおう」

「オーケー。もちろんはやてには秘密だぞ」

「無論だ」

というわけで、シグナムらと協力して蒐集を行うことになった。と
いうか・・・。

「もしかして今から行くとか言うんじゃないだろうな」

「あ？今からに決まってるだろうが」

という事はもう蒐集がはじまってんのかよ！ならここは少なくとも
10/27以降の話か。

「ん、じゃあ行くっか」

「ああ」

そんなわけで、名も知らぬ世界に来ちゃってます。藤岡弘がここで
探検していても絶対不信感を抱かないような密林にいたい何があ

るんだよ？

「で、ここにリンカーコアを持つてるやつがいるのか」

「ああ、そうだ。少なくとも5は反応がある」

レヴァンティンの柄に手をかけながらしゃべるのはシグナム。今回は初めてという事でシグナムだけが付いてきてくれるそうなの。しかし人っ子一人いない。さりげなく感じる不快感を無視しながら

散策していると、突如魔力が増大するのを感じた。

「来るぞ！！」

シグナムの言葉で散開する。すると、数瞬おいて元いた場所に大きなクレーターができています。

回避しながら地面を穿った敵を確認すると、なんかFFの結構終盤に出てきそうな魔物がいた。

「アバドン……」

FF9に出てくるカマキリっぽいそれは、体勢を立て直すと、すぐさまかまいたちを放ってくる。俺は万難排す^{アイギス}魔除けの楯で防御したがシグナムは。

「はあ！！」

ぶった切っていた。おいおい、いくらなんでも暴挙じゃないか。

「いつの間に盾をだしたんだ！？」

「こいつが俺の能力なんでね。こいつは俺がやるから下がってる」

「しかし「それに、俺の実力を見たいだろう？」くっ……」

しづしづと、シグナムは下がる。よし、では行くかね。

「来い、『あめのむらくも雨叢雲』」

名前こそ日本名だが、実態は西洋型の剣。ヤマタノオロチを討つた際に出てきた剣で、その力は日本の宝具では非常に強力な剣だ。それを振りかざして、アバドンに斬りかかる。が、右のカマで受け止められた。

「グギヤアアアア!!」

うげ・・何度聞いても不快感を煽る鳴き声だ。雨叢雲で正面から受けた後、うまく受け流してアバドンの懐にうまく入り込んだ。さて、試しなかった剣技をここで出してみますか!

そう考えた俺は剣を縦に構えて魔力を溜める。思い切り溜めてもいいんだけど、溜めている間に攻撃を受けるわけにもいかないからすぐに解放した。

「シヨック!!!」

ずがああああん!!!

すると、アバドンが粉々に吹き飛んだ。・・いやあ、いくら圧縮魔力を1点で思い切り解放する単体攻撃があんなに破壊力抜群とは・・・。恐れ入った。

「なんて無茶苦茶な・・・」

シグナムもむちゃくちゃ引いていた。ごめん、やりすぎた。

結局、5匹のターゲットは俺が全部片づけた。

第3話 いや、こんな展開じゃなかったよな（後書き）

千里「・・・で、非常に頭の悪い展開だったな」

作者「さーせんー!!」

千里「で、A・Sもぜんぜんと」

作者「う・・・」

千里「まったく。そんなでよくA・Sから書こうなんて思ったな」

作者「しょうがないじゃないか・・・書かないと置いて無駄に練った原作をベースとしたオリジナルの展開考えてたし。それにはどうしてもここから書く必要があったんだよ」

千里「まずはA・Sを見る！」

作者「大丈夫、細かい描写はともかくあらすじはなんとか押さえてるから」

千里「さいで」

作者「それではこんな駄作を読んでくださった方には多大な感謝を。それでは次回はなのはsideにも介入します！」

第4話 介入

それから守護騎士の収集を手伝い終えた俺の今日の宿は、そのまま八神家のお宅になった。

その際の部屋割なんだが……………。

「別にザフィーラとリビングで寝てたらいいだろ」

「それは酷い仕打ちよヴィータちゃん！はやてちゃんを助けるために協力してくれてるのに！」

「コイツ男なんだから一緒には寝れないだろーが！」

「……………そもそも、我等は防衛プログラムに過ぎないだろう」

ヴィータとシャマルが無茶苦茶揉めた。端からちよつとだけザフィーラが口を挟んだがスルーされている。

「なあ、ヴィータっていつもあんななのか？シグナム……」

「……残念ながらな。主はやてには懐いているんだが」

やれやれこれだから末っ子は……………といった感じでかぶりを振るシグナム。

なんかこれを見ると……あれだ、シャマルが優しい長女でシグナムがクールな次女、ヴィータがやんちゃな三女なんだな。そいではやてがお母さんでザフィーラがペットみたいな。

後今はまだいないリインフォースが老婆ちゃんで、リイン？が末っ子。

要約すると……………団子大家族ならぬ八神大家族。

やべえコレツボツたWWW

一人で妄想したネタで腹を抱えて笑いを押し殺していると、シャマルがこちらまでやってきてしゃがみ込んだ。

「どうかしたの、千里くん？なんかピクピクしてるけど…」

「だ、大丈夫……笑い堪えてるだけだから」

「何もおかしいことないのに、笑ったのか？変なヤツ」

ヴィータが呆れたようにため息をついた。

いやそれがね、三女よ。私めが考えた八神大家族ネタがですね………

「ブハツWWWゴハア!？」

吹き出したらヴィータにグラーファイゼンで鳩尾を強打された。

「テ……メエ……ッ」

絶息してまともに話せねえ………！つかいくら俺でも生身でグラーファイゼン強打は死ぬわ!!

「今すげえ馬鹿にしたこと考えてたろ」

「め、滅相もございません………」

でもいつかはネタにしたいと、そう考える俺でした。

結局、シグナムの部屋で寝ることになった。

理由はザフィーラはリビングなので除外、俺と一緒に嫌なヴィータはダメ、シャマルはヴィータが何か俺にするんじゃないかと疑いだして却下。

なら三人纏めて同じ部屋はどうかと言ってみたが、それは俺が9歳の子供だからダメだとのこと。

で、シグナムの部屋。

「凄く片付いてるな……」

「まあ特に置くものなどないしな」

一般的な学生に似た景観だけど、唯一特異といえば隅に置かれていた剣道用具。そういえば近くの剣道場で非常勤講師してるんだっただか。

「というか一人で寝てる？」

「まあ、な。覚醒当初はみんな寝ていたんだが、主はやてが、な」

「……………分かった。言いたいことは分かる」

シグナムが自分の胸を見ながら言った時点でそれははやてのセクハラを単に嫌がったということだ。

「…貴様はさすがにしまいな？」

「いややったら犯罪だから。女の子同士だから許されるんだよ」

まだ俺は死にたくない。

そんなこんなで寝た。

え？ラッキースケベなんてありませんけど何か？

それからしばらくはどういうわけか八神家で延々お世話になっていた。

はやては親に心配かけてるんじゃないかと心配したが、その辺はシヤマルがごまかしてくれた。

もちろん、蒐集のお手伝いもしている。俺が宝具を出す度にシグナム達には驚愕の目で見られた。

曰く、『貴様バクだろ』。

バグですよー、謎の女の差し金です。

そんなある日、ヴィータがはやてがシャマルと買い物に出かけた頃を見計らってシグナムと俺を呼んだ。

「どうしたんだよヴィータ」

「昨日この街でデカイ魔力反応を捉えた。推定AAA」

そいつは間違いなく将来の魔王、高町なのはだな。もちろん口には出さない。

「ふむ……意外だな、そういう奴がいたとは」

「それで、どうするんだよヴィータ」

「もちろん、リンカーコアから魔力をいただく。あたしがやるからな」

やる気満々だな、ヴィータ。シグナムはふむ、と頷いた。

「分かった。ならばおまえに任せる」

ヴィータは分かったと言わんばかりに服装を騎士服に変える。グラーファイゼンを担ぐと、そのまま空へ飛んだ。

「……………」

「ん？どうした舞阪」

「いや、なんでも」

しかし俺としては魔王とエンカウントはしておきたい。

……よし、スキを見て「心配か？」ぐあ……………。

「ま、まあ…なんせ能力的にはヴィータと同じだから」

「確かに能力はヴィータと同程度だ。が、本当に実力は同程度か？」

アンサーはノー。だが、スターライトプレイヤーなのははお話聞かせてがある。それを考えると、少々不安だ。

「けど、有り得ないことは有り得ないから。だから心配だ」

「フツ……………優しいな、貴様は」

ぐりぐりと頭を荒撫でしてくるシグナム。ちょ、痛い痛い。

「そんなに心配なら、しばらくしてから付いていくといい。その代わり、ばれないようにしろよ？アレはアレでプライドがあるからな」
「分かってるよ」

そう言うと、俺は自分にステルス魔法をかけるとフライヤーフィンでヴィータが向かった先を追い掛けた。

俺が問題の地点まで来ると、すでに結界が張られていてウィータはなのはと交戦が始まったようだ。

さて、これを通してのは……………無理だな。干渉が出来ないタイプの結界だ。本来なら干渉不可能だが、俺は出来ます。

そう、影を伝う魔法。いくら干渉阻害結界を張っても、自然現象までは制限できない。というか自然現象を阻害する結界は術式が複雑で一種の禁術だから使い手はほばいない。

なので、この転移魔法。これによって結界内に入り込めた。

「……………そこか」

それから、魔力の淀みを感じを研ぎ澄ませて感知する。

あ、片方の魔力がブレた。そろそろなのはがぶっ飛ばされたあたりか。なら、ウィータがなのはに詰め寄った時点でフェイトが来る。

「急ぐッ」

「ぶっ、ぶっ……………」

「諦めな。助けなんかこねーよ」

あたしはアイゼンを構え直した。

あたしが捉えた反応の持ち主は確かに栗毛のこいつだ。だけど、意外とデキるやつだった……。なんなんだよあの有無を言わせない砲撃。ちよつと貰っちゃった。

まあいいや、とつとリンカーコアを頂こう。

そう手を伸ばした瞬間

『ハアツ!!』

「なっ!?!」

突然だった。栗毛の前に魔法陣が現れたかと思うと金髪が出てきた。まさかの展開だ……。間に合うか!?

「やらせるかよ」

ガキンッ

「ッ!!」

それを誰かが受け止めた。

それを見て金髪と栗毛が驚愕していた。あたしも驚愕していたと思う。

だってそいつは、家に置いてきたはずの

「悪いな、こいつは……やらせぬーよ」

舞阪のヤローだった。

第4話 介入（後書き）

作者「はい、第4話でした」

千里「そしてようやくまともなバトルか…」

作者「予定よりかは早いかな？戦う前になのはと絡み用意したけど省いた」

千里「まじかよ………」

作者「さて、読んでくれた人には多大な感謝を。次回予告はついにフェイトとの初バトル。見知った以上の機動力に千里は！？」

千里「次回も楽しみにしてくださいな」

第5話 激突！VSフェイト

ふう。なんとか間に合った。しかし、さっきのを見てるとヴィータのやつ間に合ってなかったな。

やっぱり本当に紙一重のタイミングだったんだな。

「オマエ・・・なんで・・・」

「なんでってそりゃ仲間の心配して悪いかよ」

「アタシ一人で十分だっつーの!!」

くう・・・ツンデレ。可愛いけど今は戦闘だ。気を確かにしないと。

「私は時空管理局囑託魔導師フェイト・テストロッサです。危険物所持と一般人傷害の罪で逮捕します」

「断ると言ったら?」

「・・・実力行使です!!」

そう言っつて間髪入れずにバルディッシュで斬りかかってくるフェイト。もちろん俺は当たるはずがない。ついでにヴィータをひつつかんで空域離脱した。

「って当たり前のようにつかむな!!」

「んなこと言っつたってお前連れなきやお前が捕まるだろうが!!」

「それは・・・そうだけどよ・・・」

なんかどもるヴィータ。全く素直じゃないな・・・ってもう追いつきやがったか!!

「下がってるヴィータ!!」

そう言つて俺はとっさに投影した干将・莫耶で受け止めた。くそっ、意外といい攻撃じゃないか！

「はあああああ！！！！」

「ちっ！！！」

そのまま斬撃の応酬をする羽目になる。隙を見つけては狙うが、こいつの持ち前の速さで全部躲される。

「ヴィータ！！！」

「なんだよ！！！」

「シヤマル近くにいるんだろ！？俺がこいつら惹きつけておくから今のうちにリンカーコアの魔力を闇の書に食わせる！！！」

「バツ、相手はAAAの魔導師だぞ！？」

「大丈夫だ、俺を信ズさせない！」くそっ！！！」

だああああ、なんでこいつは話の途中で！！！！まあ俺もそうするけどよ。話を邪魔されるってこういう気分なんだな。

「・・・つたく、負けんじゃねーぞ」

「わかつてる」

諦めたヴィータは前線を離れた。それを見届けた俺はフェイトに向きなおつた。って、ユーノとアルフもやってきた。こいつは厄介だな。

「3対1。君も、この状況はわかるよね？」

「まあ、俺はピンチだな」

「・・・なら、無駄な抵抗は「か」といつて諦めると思ったか？」な

!？」

「先ずはお前の動きを縛る！」

干将・莫耶を戻し、俺は拘束魔法で縛った。術式は適当に組んだので名前とかはまだ決めてない。

「なっ、無詠唱でこんな尋常じゃない硬さなんだい!？」

「はっ、俺をなめるな!！」

「アルフ!！このおおおおお!！」

おいおい・・・アルフが動けなくなっただけでヤケになるなよ。おかげで太刀筋が見え見えだぜ？

攻撃があまりに素直になり始めたので攻撃をよけるのは簡単になった。それでも攻撃を当てにくいのは相変わらずだけど。

その時、俺の両腕を緑の鎖が縛った。この魔力光・・・ユーノか。

「悪いけどこれで動けなくさせてもらおうよ」

「これで縛ったつもりかよ」

あっさりとハンドブレイクして自由の身に。それでも若干のタイムラグができてしまい、フェイトに攻撃の隙を与えてしまった。

「ハーケン、セイバー!！」

自動追尾型の魔法、ハーケンセイバー。避けても追いかけてくるのは厄介だな・・・なら。

「来い、無アロム毀タイトなる湖光」

かの約束エクスカリバーされた勝利の剣と対をなす、刃毀れを知らぬ神造兵器。そ

して竜殺しと親族殺しの魔剣。

このアロンドイトを振るい、ハーケンセイバーを砕いた。そのまま驚愕するフェイトの隙について背後に回り、蹴り飛ばす。

「ああああ!!」

「フェイト!!」

あ…やべ、やっといて可哀相とか思ってしまった。だって女の子だし。

とか言ったらヴィータから念話 came。

(おい、千里!)

(どうしたヴィータ)

(魔力はきっちり頂いた。もう大丈夫だからさっさと逃げろ!)

(は?どうし)

……待てよ?時間的にはもうなのはの魔力はある程度回復している。そして準備時間はきっちりあった。

そして………脳裏にちらついていたのは、アニメのあのシーン。

「く、間に合うか!??」

「ま、待て!!」

魔力の尋常じゃない集束を感じた俺は、すぐさま転移魔法で逃走す

る。

フェイトがなんか言ってたけどスルーだ！

俺が転移しきったコンマ3秒後。俺がいた場所を桜色の集束砲撃が穿ったという。

この話は後程フェイトから聞かされることになる。

- Side Kurono -

くそつ、なんなんだ一体！

なのははやらね、フェイトとアルフは為す術なし、さらにはユーノのバインドも素手で壊された。

極めつけはあの少年が持つ稀少技能とおぼしき能力。

……武器を自在に出し入れする、しかも計測では何かしらの能力が付与されていた。

「強敵……なんかじゃ生温い……」

あとKYな男とかクソ真面目とか言うツツコミする奴はエターナルコフィンで凍付けだッ!!

『……クロノ？よく分からないけど、変な心の叫びが聞こえたよ？』

「気にしないでほしい……。フェイトにはまだ早い世界だ」

『？』

ああ、フェイト。そんな可哀相な目で僕を見ないでくれ。

『それよりクロノ。彼等の事だけど』

「ああ。映像は確認した……なんなんだアレは」

『分からない……あの茶髪の男の子は武器を一瞬で出し入れして、瞬時に対応してきた』

『私の砲撃も、当たる直前の一瞬でかわされて逃げられたの』

『それは多分転移魔法のひとつじゃないかい。一瞬だったから少量だけど魔力を感じた』

「フェイト、少年の武器の出し入れに何かしら異変は感じなかったか？」

『分からない……。ただ、最初に出してきた黒と白の剣で攻撃を止められた時には何か魔力防御に似たものを感じたよ』

ふむ………さつぱりにも程がある。情報が足りなさ過ぎる。こちらについても、調査が必要だな。

『分かった。フェイトとアルフはある程度回復したらアースラに戻

つてきてくれ。ユーノとなのはは魔力と体力回復に専念すること』
『あ、あの!』

最後になのはが若干焦った顔で言葉を遮ってきた。

『赤い女の子の攻撃と最後のスターライトブレイカーで、レイジン
グハートが……』

「分かった、家に着いてから転送してくれ。シャリオに頼んでおこ
う」

『ありがとう…クロノ君』

なのははにっこり笑顔で言う。ちょっと可愛い。

……さておき、対策を練らなきゃな。

「あの子の魔力凄いわね。一気に30ページも埋まっちゃった……」

まあ将来を期待された魔導師だしな。そりゃ埋まる。

「で、大丈夫なのか？千里」
「まあ、なんとか」

心臓はバクバクだったけどな。転送先から自分がいた場所見たら、スターライトブレイカーが通過していたんだから。

「グイータこそ大丈夫なのかよ」
「アタシは大丈夫だ」

……顔を逸らしながら言われても説得力はないぞ。

(舞阪)

(どうかした？シグナム)

(いや、あの金髪の子供はどうだった？)

……バトルマニアめ。仕方ないから率直な感想を述べた。

(素材だけで言えば最高峰だろ…パワーはシグナムに負けるけど、速さは圧倒的。将来は間違いなくエースだ。…しかし悲しいかな、あいつは性格が戦いに向いてない。仲間がやられて激情するし、不足の事態にいちいち驚きすぎ。まったく、もったいないったらありゃしない)

元々ああいう奴らの方が戦いに向いていないんだよな。戦いに立つなら冷静であれ……戦場の基本の一つ。
正義の味方気取りはいつか自分を滅ぼすつてのモカのFateの赤い弓兵アーチャーも立証している。

(そうか……貴様も案外甘い奴だと思っがな)

(え、結構殺気は持ってたけど?)

(あれだけ分析しながら、本気で戦えるか?)

まあ…アニメを見たという名の未来予知を持ってますから。全部とは行かなくてもある程度は覚えている。

(まあ、いい。戦える時を楽しみにしよう)

その声音は、心なしか久々の強敵に燃える剣士のようであった。正直に言う、とぼっちり受けそうな気がしてならない。

「っ?」

と、そこで僅かに腕に痛みが走った。

見てみると、若干腕が小さい火傷を負っていた。捉えきれなかった時に付けられた傷か?

「……なかなかやるじゃないの」

いかにチートと言えど、しっかり扱い切れなければただの無駄なことかよ。なら……やってやるさ、この世界を変えるまでになっ!

第5話 激突！VSフェイト（後書き）

千里「最後セリフがクセエよ。つかチートのくせに傷つくとかダメじゃん。チートは自重しないからチートなんだぜ？」

作者「世の中そんなに甘くないー」

千里「テメエ！！」

作者「ちなみに案外作者はリアル多忙であんまりアニメ知識ないんですよ。チート能力に圧倒的偏りとかあからさま間に合わせネタが出るのはご了承ください」

千里「バカだろ。フェイト縛った魔法も名前無しだし」

作者「……………反省しています」

千里「それでも読んでくださった方には多大な感謝を致します。本当にありがとうございます」

作者「さて次回は。ついに魔王らとプライベートで遭遇……………そして、そこで何を語らうか。もしかしたら千里スペック挟むかも」

千里「えー……………。まあ次回も読んでくれよー！」

舞阪 千里スペック

作者「と、いうわけで……。今回は主人公スペックを曝そうかと思えます。それに連なって舞阪千里誕生秘話でも」

千里「どうせ大したことないんだろ」

作者「う……っ」

千里「てか、王の財宝って武器の真名解放出来ないよな」

作者「だからしてないじゃん。いずれするけど」

千里「オイ……!」

作者「原作の破綻はあまりしてないけど？あの中に入っている財はギルの財宝庫に入っていたもののように、お前の財は生前にお前が頭に貯めたアニメの知識から連なる武具ないし希少物だから………
というのは半分嘘で、謎の美女のオプションです」

美女「くっくっくっ………感謝なさい」

千里「こじつげだな。まあそのおかげで出来ないことが出来るからいいけど」

作者「えー、というわけで、現時点での明かせる主人公二人の設定と能力を公開します」

舞阪まいさか千里せんり

身長 132cm

体重 28kg

魔力総量 EX

使用デバイス：現在なし

能力1：宝具生成

古今東西あらゆる宝具の使用と格納が出来る能力。千里が生前見聞
きした創作武器一（例えばゲームに出てくる武器や、アニメで扱わ
れる現行兵器のオリジナルカスタム）なども扱えるが、能力を授か
った時点で千里が知識を持たない宝具は格納されていない。

なので、そういった宝具を新たに創作する場合は、能力に比例した
魔力が必要。

能力2：魔導師マジシャンの栄光オーロリー

宝具生成の魔法版。古今東西あらゆる魔法及びそれに連なる非科学
的な事象を己の魔法として記憶し、使役する能力。その目で見た魔
法も、どういった効果を現すか等簡単に分かっているれば即興で撃つ
ことも可能。

しかし神の領域を犯す魔法一（死者蘇生など）は使用出来ないし、

術式の設定が前提としてある魔法は術式を設定しなければならない等、それなりに制約はある。

能力3：?????

見た目：Rewriteの天王寺瑚太郎の瞳をキリツとさせた感じ。瞳は澄んだ黒。

性格：一言で言えばおおらかで、誰にでも優しく接する。瑚太郎みたいなへらへらした感はない。

ただ、若干正義の味方のような行動を取ることも。

千里「?????つてなんだよ」

作者「まだ本編で使っていない能力。使っていないのに公開するのはネタバレ」

千里「さいで。まあ術式うんぬんは面倒だな」

美女「制限をつけるからここまでの能力を与えられたことは分かって?世界は等しく揺れ幅を許しているけれど、それを超えれば世界は崩壊するのよ?」

千里「……………すみませんでした」

美女「分かればよろしい」

作者「そもそももう一人の主人公、未だ名を明かされない少年の設定はこちら」

名前：?? ??

身長：130半ば

体重：30前半

デバイス：非人格の両刃剣

能力：???

見た目：ガンダムWのヒイロの瞳を若干柔らかくした感じ。しかし、現在その面影はプロローグでは感じられない。

性格：???

千里「謎だらけじゃないか」

美女「彼を見つけなければ………貴方、死ぬのよ」

千里「契約が違う!!しかもすげえ深刻な顔してる!!」

作者「実は一連の物語に深く関わってきませんが、それはまた先の話
さて、これくらいにして誕生秘話なんだけど……………」

千里「うん」

作者「言うのやめた」

千里「待てよ！喋るんじゃないのかよ!？」

作者「いや、喋ったらネタバレになる」

千里「なら言うなよ……………」

作者「すいませんでした。ちなみに、こいつの名前…………… JR時刻
表の路線図眺めていてよさげな駅名を響きで繋ぎ合わせたポンコツ
ネームです。ちなみに舞阪は東海道本線の浜松駅から名古屋より2
駅目。千里は高山本線の富山から4駅目です。他にもいろいろ小説
書きましたが、キャラ名は大抵駅名やJRの特急・急行から拾って
ます」

千里「ヒデエ……………」

作者「職業柄しかたない。さて、次は必ず本編更新いたしますので
こっご期待!」

作者「……ところで、お気に入りが8件なんだけど。PVもなんか3500いつてるし」

千里「お前のハナクソみたいな話作りが受けてるんだろ」

作者「読んでくださる方本当にありがとうございます。必ずや完結させますので………」

第6話 翠屋（前書き）

作者「なんかスペックあげたらお気に入りか4件増えたんだが……」

千里「……………」

作者「登録してくださった方、本当にありがとうございます」

第6話 翠屋

そんなこんなあり、俺はやっぱり八神家の厄介になっていた。

というかそろそろ帰ろうかとしたら、はやてに待ったをかけられてしまった。

「だめやだめや！千里くんはもううちの家族同然なんや！それでも帰るんゆーなら……………シグナムとシャルルに」（性的な意味で）酷い事する」

「お願い千里くん。私、はやてちゃんがそっちの道に墮ちるのを見たくないの」

「私からも頼む……………もうしばらく住んでくれ」

……………なんて頼まれたら残らざるを得ない。とはいえ、俺もなんだかんだで八神家の暮らしにすっかり馴染んでしまっていたりする。

思えば仮染めの家庭とはいえ、ここは温かだ。今更あの一人暮らしはちょっと出来そうにないな……………。

が、今日は違う。

はやては定期通院の日でない。

シャルルはもちろん付き添いで、ヴィータはザフィーラの散歩。つかザフィーラよ……………お前普通に犬みたいな暮らししていいのか？

そしてシグナムは剣道の非常勤講師に出掛けた。

つまるところ、今日は守護騎士業がお休み。

俺が起きるのが一番遅かったらしく、起きた時には朝ごはんとはやの書き置きが残されていた。

テレビを付けながら、はやてが残した朝ごはんを食べる。今日も日常と変わらぬニュースをしていた。

「……………トマ」

今日ほど暇を持て余した日はない……………。大概この家には誰かいたし、なにか暇を潰す道具もない。

……………よし。

「翠屋に行ってみるか」

かの魔王を有する戦闘一家高町家の経営する喫茶店。

魔王とエンカウントするかもしれないけど、暇潰しとお土産を兼ねて訪れてみよう。

幸い、翠屋は簡単に見つけられた。この海鳴市ではそれなりに有名な喫茶店らしいから。

訪れると、その入口では一人の三つ編みの女性が掃除していた。

「あらいらっしやい。寄ってくるの？」

彼女は高町美由紀。小太刀二刀流を使うんだっけか…この世界でそんなのかは知らない。

知らない……けど、あの女の事だ。間違いなくとら八とリリなの設定がごちゃになってる筈。

「…どうしたの？私を見て固まっちゃって」

「い、いえ」

「変な子。さっ、入って」

そうやって案内されるままに翠屋の玄関をくぐると、そこにはなのはの母親桃子さんとなのは、通称……

「魔王……」

「ふえ！？私魔王じゃないよ！？」

あ、声に出ていたか。つか生で見た桃子さん若すぎる。いくつだあの人の。

「いらっしやい！初めてのお客さんね？」

「ええ、まあ」

「そう…今日は何頼む？メニューはこれよ」

しかも凄く若々しい振る舞い…なんとなく若々しい理由がわかる気がする。

メニューはありふれた喫茶店だった。ソフトドリンクやコーヒー、簡単な一品料理に洋菓子が並ぶ普通の品揃え。

「じゃあカフェオレとシュークリーム2つ。後持ち帰りでシュークリーム一箱」

「はあい、ちよっと待っててね」

そうして桃子さんはキッチンに消えた。なんかそこから軽やかな鼻歌が聞こえてくる……。

美由紀さんもいつの間にか店前の掃除に戻ったらしく、店内にはいなかった。

「……………」
「……………」

……………だから、魔王と二人きり。しかもすごいガン見してくる。

コイツが砲撃で最後に狙ったのは俺だ。間違いなく直撃コースだったのに、なんで避けられたのかみたいなの？
あるいはどうして敵がわざわざ敵地に足を踏み込んでくるのかみたいな感じなんだろうな。

(……………あのっ)

……………なぜ、話し掛けてくるのは。

(あの時、フェイトちゃんと戦った人だね？どうしてあんなことするの?)

(……………)

(ねえ、聞いてる……………?)
(……………)

72

どうでもいいなら答えたいけど、正直話したくない。
話せばコイツは絶対助けようとしてくるし、なによりこいつらが追う闇の書に携わる事項だ。

(悪いけど、話したくない)

(でも……………もしかしたら私達に出来ることがあるかもしれない。
だから、お話聞かせて?)

上目遣いでこちらを見てくるのは。

……耐える、耐える俺。この笑顔はフェイクだ。この笑顔は一必殺 O H A N A S H I 聞かせて《スターライトブレイカー》のシークエンスに過ぎない……。

(じゃあ。せめて……お名前だけでも……)

(……舞阪千里)

(私は、高町なのはだよ)

(ああ)

知ってるとはさすがに返せなかったので、適当に返しておいた。すると、カランカランと翠屋の扉が開く。

「やつほー、なのは」

「なのは、来ちゃった」

「おじゃまします」

「フェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん！」

「ってなんであたしより先にフェイトが出てくるの!？」

「ふええ!？」

「あ、アリサ」

「アリサちゃん落ち着いて……」

誰かと思えばアリサとフェイトとすずかだ。

なのはも俺の近くを離れてアリサ達の元へ駆け寄った。

と、同時に桃子さんがカフェオレとシュークリームを持ってきてくれる。

「はい、シュークリームとカフェオレ。召し上がれ」

「ありがとうございます」

どれどれ……………はむっ。

「　　ッ!?!?」

「ど、どうしたの!?!?」

な……………なんなんだ、一体。このまるやかなシユーの食感に甘すぎないクリーム。
しかもかじった時にどぼつと出るクリームがあまりない。こいつはまさしく

「スイーッ」(笑)なんて付けさせないわッ!?!?」　　「たあああああ
ああっっっ!?!?!?!」

「「アリサちゃん!?!?」

痛っっつてええええ!?!?!?テメツ、どこからハリセン出しやがった
!?!?つかなんて展開が読めるんだ!?!?サイコマンティスか貴様ッ!?!?

「どこぞの緑のキモオタニートは大嫌いのよ」

今にも殺さんと言わんばかりの眼光を携えたアリサ。

……………やべえ後ろに仁王が見える。

(千里くん、大丈夫……………?)

(ああ…魔王の砲撃並に痛かった……………)

(だから私は魔王じゃないよ!?!?じゃなくて……………アリサちゃんミド

レンジヤイってアニメがあるんだけど、それが下ネタばかりで大嫌いなの)

(……………絶対深夜アニメだろ。つかなんでお前も知ってるんだよ)

(それは……………アリサちゃんが見たかったテレビと間違えて録画されたやつで……………)

(あ、ああ……………)

確かにあれは小学三年生には刺激が強すぎる。つか他作品ネタが多すぎてピー音満載な話もあったな……………。

実在するアニメではありません。

「で？辞世の句は読めたの？」

「申し訳ございませんでした」

くっそう……………俺被害者なのに……………。

「……………ところでこいつ誰？」

「……………シバいてから言うなッー!!」「……………」

「わ、悪かったわね！で、アンタ名前は？」

「普通お前から名乗」「あ？……………舞阪千里」

ダメだ。アリサが怖い。

「ふうん、千里ね。あたしはアリサ・バニングス。こっちの紫の髪の子が月村すずか。こっちの金髪の子がフェイト・テストロツサよ」

「よろしく、すずか」
「じちらじそ」

すずかはにこやかな挨拶をする。が、フェイトは仏頂面で俺を睨んでいる。

まあ睨むよなー、メッコメッコにしたし。下手に聞かれるのも嫌だからさっさと帰ろう。

「じゃあ、もう帰るわ」

「え、もう帰るの?」

「家族が待つてるし。あ、桃子さんシュークリームお願いします」

「はいはい、シュークリーム」

桃子さんからシュークリームを受け取ると足早に翠屋を出ようとした。

(千里くん!)

(どうしたよ)

(あの……また戦うことになるのかな?)

(…だらうな)

(そっか……でも)

(大丈夫。ここじゃ何もしないしする理由がない。だけど、お互いバリアジャケット着たら……敵同士だからな)

(うん……お話、必ず聞かせてもらうの)

(ま、頑張りな)

そこで、俺は念話を切った。

このシュークリーム。あいつら喜ぶかな。

- Side nanoha -

千里くんが帰った後、私はちょっとぼーっとしていた。

(次会えば、敵同士)

少くく話してくれてもいいのに……全然お話聞かせてくれなかったの。

(なのは)

(何? フェイトちゃん)

(あの人、この間の人だよ。なにか話聞けた?)

(それが、あんまり話してくれなかったの。詳しいことは教えられないって)

(そっか……でも、絶対聞かなきゃね)

(うん…そうだね。千里くんも聞きたかったら俺を倒せって言っ
たし)

千里くんはきつと嘘を言わない。

ようし、絶対絶対ぜえええつたい！千里くんからお話を聞くため
に倒すの！！

- Side senri -

「うわぁ、めちゃくちゃ甘いなぁ」

「ホントだ。一体どこで買ったんだよ千里」

「悪魔の家の喫茶店」

「悪魔？」

「「「「ああー……」」」」

はやては？マークを浮かべたが、他の守護騎士にはバツチり通じた。

(つーことは高町ナントカに会ったのかよ)

(ああ。大丈夫、闇の書については話してない)

(ならいいけどよ………)

念話で物騒な会話。

でも、あのシグナムですら嬉しそうにシュークリームを頬張っていたんだ。

たまには買いに行つてやるつと俺は思った。

第6話 翠屋（後書き）

作者「はい、第6話でした」

千里「なあミドレンジヤイって……………」

作者「私が携帯小説で一番爆笑したギャグ小説だよ。ヤホーでググったら出るかもね」

千里「まあ人の作品だからおおっぴらに言えないけどな。さて、次の話はどういくんだ？」

作者「そうだなあ……………カートリッジを搭載したなのはらと再線かな。後は…………ふふふ」

千里「なんだよ不気味な笑いは」

作者「ふふふ。では読んでくださった方には多大な感謝を。また次回も読んでくださいね！」

第7話 なかなか進まねえorz

あくる日。

今日は蒐集の仕事があるシャマルに代わってはやてと買い物に来ていた。

もちろん、シャマルは上手いことごまかしたが。

「えへへー、千里くと買い物やー」

「嬉しそうだな、はやて」

「もちろんや！だって初めての男の子とお出かけやし、千里くと外おるんは初めて会^おった時以来やろ？」

まあ喜んでもらえてなにより、なんだけど。それはつまるところ逢い引きというやつで……。隣にいる女の子は、

「ん？私の顔になんかついとる？」

将来機動六課隊長になる八神はやてさんです。

二次創作で変態扱いされるわ莫大な魔力を携えているのに能力柄なのフェイの影に隠れてしまう悲運の女の子。

けど……………ショートヘアにおおらかで着飾らない性格が可愛いんだよ。こんな女の子に好意を持たれるってこんな嬉しいことって痛い痛い！誰だよ石投げた奴！！

「いや、なんでもないよ」

「うーん？変なの」

見とれていたなんて言えないから。

「で、どこ行くんだよ」

「んーとな、ツヤスコや」

おい誰だ某書き換える物語のパクリとか言ったやつ。しょーがないだろ、マイナスイオンだかなんだかグループに近い響きの単語って限られるじゃん？JRがNRとかSRとかに変わるのと同じ。マガジンがマガニヤンになるのと一緒にだよ。

分かる？いくら大衆に晒されたものでも使ったらキャンキャン言う連中もいるんだよ？実際某書き換える物語で飲食店店主が捕まってたじゃん。

そういう響きをあてがうのって大変なんだよ。特にね、ラブコメが大変なんだよいちいち考えるのがさ。

そういうご都合主義な部分に物申す、作家達の苦悩が分からない奴には腰を据えて問い詰めたい！小一時間問い詰めたい！！

だからさ、そういうのは無しでいこう。ね？世の中には気にしたらダメなこともあるんだから。

「って何作者の気持ちを代弁せにやならんだああああッツツ！！！！」

「千里くんが狂た！？千里くんみんな見とるで！！なんか子連れのお母さんが痛い子見る目で見とつよ！！？」

「クハハハハハハ！！兇まがれ！兇がれえ！！」

「千里くううんっつ！！だめええええ！！」

少年鎮静中…

「……………」
「ごめんはやて」

「大丈夫、大丈夫や…私は千里くんが元に戻っただけでも幸せや…

……………」

あれから10分くらい暴走していたらしい。

その様子ははやて曰く、『世の中には知らんほつが幸せゆつ時もあるねん』とのこと。

何したし俺。つか、よく魔法とか使わずにいたなあ……………。あの女に聞いてみるか。

「さて、こんなもんかな？」

多少いざこざがあつたけど、ツヤスコで求めるものをすっかり買い込んだ俺達は帰り道をはやての車イスを押しながら歩いていった。

「いやあなんか異様に疲れたなあ……」

「そうだな……」

とてもとても疲れたので、その辺りのベンチで休むことに。俺は座って、そのそばにはやてが車イスを寄せてはあく、とため息をついていると。

「いいいいいいすやあああああきいいいいいいいもおおお
おおっおお」

なんなんだこの間の抜ける声は！と突っ込みたくなるような焼き芋の屋台が目の前を歩いてきた。うぜえ……。けど、いいにおいを醸し出しているんだよ、マジで。

「ええ匂いやな……。食べてく？」

「そうしようか。ちよつと肌寒いし。おじさん、焼き芋一つ」

「あいよ、彼女と半分こかい？」

「彼女じゃないですけどね」

茶化すおじさんを軽くあしらって芋を受け取り、はやてのとこまでそれを持ってくる。目の前で半分に割ってあげて、はやてに手渡した。

「あ、あつ……。っ」

「大丈夫か？」

「う、うんなんとか」

そうして二人並んで焼き芋を食べる。・・・やべ、うまい。

「ほわぁ、アツアツでうまいなぁ。買ってよかったね?」

「ああ、そうだな」

はやてもすごく嬉しそうな表情を浮かべる。その笑顔はとても輝いていて。

「・・・」

「ど、どしたん? 顔赤いで?」

「夕焼けが反射しただけだ」

ふう、何とか誤魔化せた。うん、だって本人を前に見とれたと言えないじゃん。

「さ、さっさと帰ろう。きつとみんな心配している」

「せやね。じゃ、かえろっか」

「ああ」

(おい、舞阪)

(ってなんだよシグナム)

平和に一日終わるかと思っただらシグナムからの念話。なにもこんな時に蒐集はじめなくてもいいじゃないかと思っただら何かしら違う雰囲気を感じ取った。

(すまない・・・ザフィーラとヴィータが捕まった)

「よし、ちよつと遠回りして帰るかはやて」

「え? ええのん?」

(おい・・・なぜそこで主はやてとの団欒を選ぶ。その判断は微

笑ましいが一応こちらが優先事項だ)

(わーってるよ。はやて送ったら適当に理由つけて合流するから待っててくれ)

(ああ、頼んだぞ)

「……で？ヴィータとザフィーラが捕まったって？」

「ああ、やはりのびのびとは羽を伸ばせないらしい」

ここは結界が敷かれた上空。ここにヴィータとザフィーラが捕まってるらしい。

「さて、破るか。魔力がもつたないから俺がやるよ」

「ああ、任せたぞ」

そう言っつてシグナムは若干後ろに下がった。その前に。

「これを覆うように結界張れるか？」

「まあ、張れるが……どうしたんだ？」

「せっかくだから魔法で派手にぶち破る」

「……まったく」

そう言っつてシグナムは一回り大きい結界を張った。確認して、呪文の詠唱に入る。

「……フォア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ。
契約により我に従え高殿の王。」

来たれ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆、百重千重となりて走れよ……

「……千の雷キラリブル・アストラペー！……！」

ズガガガガガガガガガッツツツ！！！！

ネギ親子の最も得意とする雷系最強クラスの古代語呪文ハイエンシエント、千の雷。
約10秒に渡って降り注いだ雷は中の結界を壊すには十分だった。

「よし、うまくいった」

「もはや何でもアリだな、貴様」

「まあまあ。さっさと行こう」

しかし、この能力すごいな……魔術師の栄光マジシャン・オブ・グロリー。本当に何でも使える。

さて、なのフェイは強くなったかな。

煙に包まれた結界を抜けるとそこにはヴィータとザフィーラがいた。
が、なんか様子がおかしい。

「……あの雷はお前の仕業か」

「え、ここまで聞こえたのか！？」

「おかげさまでなあ！！！」

ちよまで、アイゼンのラケーテンハンマーで殴ろうとするのはやめる！！

「待て、ヴィータ。そいつに報復をするのはあとにしる」

そうやってシグナムはレヴァンティンの鞘から剣を抜いた。その視線の先には。

「时空管理局本局執務官、クロノ・ハラオウンだ。少し話を聞かせていただきたい」

クロノがいた。後ろにはなのはとフェイトがカートリッジシステムを携えたデバイスを構えている。

「断ると言えば？」

「力づくにでも」

「だと。どうするよ」

「「もちろん逃げる」」

「だって。なら、俺はその手助けをしますかね」

「させない」

そうやって、クロノはデバイスをこちらに向けた。

「無駄無駄。俺にかなうはずないって」

「な・・・子供のくせに」

「何言ってるんの、君も子供じゃん」

「僕は君より5歳年上だ！」

「やれやれ・・・熱くなっちゃって」

そんなこんなですでにシグナム達は転送の準備をしていた。ただ、ヴィータは若干心配そうだ。

「心配か？俺が」

「そんなんじゃないよ。負けたらぶっ飛ばすかな」

その言葉を最後に、ヴィータの声は聞こえなくなる。・・・よし、舞台は整った。

「さて、かかってこい。まとめて相手してやる」

「その言葉、後悔しないd」
「デイバイイイイン、バスタアアアアアアア！！」

つてなのはクロノのセリフにかぶせてやんなよ！心なしかクロノが切なそうだぞ！

「くつ、ロー・アイアス熾天覆う七つの円環」！

とつさに展開したアイアスで砲撃を防ぐ。投擲・射撃に強いこの盾なら十分に防いでくれるだろう・・・

「ハアアアケン、セイバアアアア！！」

「うお！？」

その背後からフェイトがゼロ距離ハーケンを叩き込んでくる。体をひねって回避した俺は両腕に干将・莫耶を展開した。

「それはあの時の！」

「ああ、あの時の双剣さ。名前は干将と莫耶」

フェイトと熾烈なアサルトを仕掛けながらそんなことをしゃべる。

「それが、あなたのデバイスなの!？」

「なわけあるか。デバイスなんかねーつとお!！」

やばいやばい。フェイトに気を取られていたら、なのはのアクセルが襲いかかってきた。ついでにクロノのステインガースナイプがやってきている。

くくっ、確かに1対3はきつい。けど、俺にはこの力がある!!
俺は飛翔しながら、魔法を詠唱する。

「フォア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ!光の精霊101柱、集
い来たりて敵を討て!魔法の射手連弾・101矢!！」
サキタ・マキカ セリエス・ルーキス

なのは達の魔力弾をはるかに超える101の魔力弾。全部相殺させてもこれは防ぎきれまい。

「な、なんなんだこの桁違いの数は!？」

「は!これぐらいで驚いてるんじゃないやねえよ!！」

さらに詠唱。そして莫耶を戻してからクロノに左手を向けた。

「ライトニングバインド!！」

「く、うわあ!！」

「クロノ君!！」

「クロノ!？つてあれは私の!！」

「補足しておく君の妹より強度があるからな」

「く……くそっ……!！」

くくく、悔しいだろうなあクロノ。なんせ義理の妹の前で醜態をさらしたもんなあ。あとは二人。

「はあああああ！！！」

「ちっ！」

至近距離からのブリッツに一瞬捕らえられなくなるが、目が慣れたらこっちのもの。若干攻撃も直線的d「アクセルシューター、シュート！」ですよね。なのはさんフリーだもんね。

しかたなく、距離を取って再び莫耶を呼び出してシューターを切り払いつつ、フェイトの攻撃をけん制する。やっべ、けっこう疲れるな・・・なんでほかの転生キャラって圧倒的火力で戦えるのかね？そりゃ俺も全力でやりたいけど・・・うん、女の子いじめるの好きじゃない。なのでちまちまちま・・・。

「だああああ！！！！もう無理！！！」

めんどくせえ！！！！一気にカタをつける！！！！

「来い、焰竜凰剣レヴァンティン！！！」

干将・莫耶を戻してシグナムのそれとは違う、もちろん宝具のレヴァンティンとも違う・・・魔界の魔剣を呼び出した。そして、そのむやみに放出されている黒い炎を練り上げて、自分の頭上にかき集めた。

「炎凰、爆碎！！炎天魔陣！！！」

そのまま、レヴァンティンを振りおろした。そこから放たれる三日月状の炎。

「……死んでないよな？」

むしゃくしゃして思い切りやつちまった感があるけど……。心臓ばくばくで爆発先を見やったらなんとか生きていたらしい。が、その足元には10発分のカートリッジが。

「フェイトちゃん！」

「な、なのは大丈夫……？」

「フェイトちゃんこそ大丈夫なの!？」

「わ、私は、だい、じょう……」

そこで、フェイトは気を失った。ちよつと火傷してるのが非常にいたたまれない……。ごめんよフェイト。ちなみにクロノは爆風でどっかに吹っ飛んでいた。

「さ、あとはなのは。君だけだ」

「う……でも、私はあなたからお話が聞きたい」

はあ、やっぱり頑固だな。どうしてそこまでできるんだろう。

「なあ、どうしてそこまで躍起になって話を聞こうとしているんだ？」

「だって、それは……。きつとどっちも事情があっけこういこととしてるんだと思う。それを真っ向から否定するのはおかしいと思っ」

へえ……。9歳なのに、こんなしつかりとした考えがあるんだな。

「それを聞けば、きっとみんなが傷つかない方法がきっと見つかると思うの！だから、お話聞かせて？」

でも、甘ちゃんて頑固なのは変わらないと。・・・やれやれ、仕方ない。

「悪いけど、話ができない。けど、なのはらが追っている事件について、ヒントつか、みんなのこの状況を一言で表してやる」

「うん・・・」

「最初になのは言ったな？きっとみんなは事情があつてこういうこととしてるって。それは正解。みんな自分の目的がある・・・もちろん、俺も。そして・・・それは愛するもののために」

「え、それってどういうーーーーー」

「閃光《flash》」

「え、きゃー!?!?」

そこまで話して、さく裂魔法で目くらましさせて逃げた。・・・俺って、アマちゃん？

第7話 なかなか進まねえorz(後書き)

千里「なんで始動キーが夕映？」

作者「千里に似合いそうだったから」

千里「さいで」

作者「しかし・・・話がすすまないね・・・」

千里「そもそもA'sがうる覚えだしな。しかもwiki見たら意外な内容の濃さで執筆が停滞しそうなんだろ」

作者「停滞はしないけど・・・書くのは遅れそう・・・」

千里「なのはファンに謝れ」

作者「調子こいてすいませんでしたOTZ」

千里「つか、魔剣ってなに？」

作者「ひと昔にはまった携帯ゲームに出てきた剣。けっこうかっこいいから」

千里「厨二全快だったけどな・・・」

作者「まあまあ。さて次回はけっこう飛ばして闇の書覚醒ぐらいまで飛ばすか」

千里「がばつとはしよったな」

作者「ご都合主義です」

千里「・・・とまあ、こんなぐだぐだですが、これからもご愛読いただければと思います」

第8話 クリスマス・イブ

- side ???? -

ここはとある管理局の執務室。その机には一人の老人が、何かの事件書類に目を通していた。

この老人こう見えても提督服を身に纏っている。その姿を見ればなるほど、貫録のある姿をしている。

その男はギル・グレアムである。11年前、前の主を持っていた闇の書を一時消滅させた英雄の一人。

そこに自身の使い魔の一匹が執務室に入ってきた。

「父様……」

「ああ、どうしたんだリーゼ」

「闇の書の蒐集ページが600ページを超えた模様です」

「そうか……もうすぐ復活がなされるといふのか」

グレアムはなにか杞憂を持った表情で外を見る。

それもそのはず、この男は11年前の事件でひとりの友を犠牲にした。そして、それをその友の妻には罪悪感を抱いていた。……そして、今現在も。

「すまない……本当にすまない……」

そこから先の言葉は声にならない。苦悩に揺れる老提督の机には嬉しそくに守護騎士と戯れるはやてと、千里の写真が同梱されていた手紙があった。

「うん……………」

「どうしたの？なのは…真剣に考え込んで」

「うん…ちよっとね」

戦いが終わってから、私は千里くんが口にした言葉の意味を考えていた。

「…それは、愛するもののために。」

私は…ユーノくんやフェイトちゃんやリンディさんにクロノくん…時空管理局でお世話になった人達のために頑張ってる。

なにより、魔法は…誰かを幸せにするためにあると思ってるから、魔法も大好きだ。

じゃあ守護騎士さん達にとっての愛するものって？

仲間？確かに合ってるけど、何処か違う。

闇の書？いや、これはあくまで自分の大元だつてクロノくん言つてたし。よく分かんないや。

じゃあ……ご主人様なのかな。

きつと、守護騎士さん達のご主人様がいい人だから。

守りたい人だから。あるいは……ご主人様が闇の書の完成を望んだから。

きつと、戦つてるのかな。だけど、それじゃ迷惑をかけちゃうから……だから、話し合つて分かりあつて、手を取り合わなきゃ。

「でももうすぐ闇の書が復活する時期なんだつてクロノが言つてた。

だから、気を引き締めなきゃ」

「そうだね、フエイトちゃん」

笑顔と勇氣。あの子たちに届いたらいいな。

あれからしばらくして、はやてが入院した。理由は話してくれなかったが、原因は分かっている。ここにきてさらに闇の書の浸食が進んだのだろう。

それからというものの、守護騎士たちの蒐集はさらに活発になっていった。俺はシャルマルのお願いで出来るだけはやてといほしいという事だったので、俺はそれを了承した。理由は簡単、おそらくここに来るであろう、仮面の二人組……アリアとロツテをひつとらえるため。

エンプティは先ずないでしょう。そして、それを普通に扱える程度には知識と身体能力は付加させてあるわ』

「だから自分でもびっくりなくらい慣れた手つきで詠唱とかしていたのか・・・」

いちいち魔法の詠唱とか覚えてないし。なんで千の雷の詠唱がしらふで出たのかずっと気になってたし。それもこれもこの女のおかげなのか・・・。

「なあ・・・俺に何をさせようとしているんだ？そろそろ教えてくれてもいいじゃないか」

『それについてはできないわ。いえ、正確には教えてはいけないの』
「はあ？」

『あなた、ツバサ・クロニクルという話は知っています？』

ツバサ・クロニクル・・・ああ、サクラの記憶のかけらを集める小狼の物語だ。

「それがどうかしたのか？」

『その中に干涉値という言葉があったでしょう。それと同じなのよ。干涉値というのは、別次元から直接別次元に何かしらの行為を行う事。私がそこに現界して話せば済む話だけど・・・あいにくそれができないのよ』

「なるほど」

『ま・・・まずはこれから起こることをどうにかしなさいね。応援しているから』

「え、あ、おい！..」

なにか言ってるやろうと思ったが、その前に魔法陣が消えた。

・・・うん、トイレに行くか。

「・・・・・・・・・・はっ？」

あれ、俺寝てたのか？しかもここどこ？

辺りを見渡す。そこは病院の一階ロビー。そのソファで寝ていた。

「いつの間に寝てたんだ・・・・・・・・？しかもその間のことも思い出せないし」

トイレで用を足してからのことか？がぜんぜん思い出せない。俺・・・・・・・・

なんで？つか、どうして病院に？

ダメだ・・・・・・・・なんかもやがかかったように思い出せない。えーっと、なんかを阻止するために・・・・・・・・。

『あ・・・・・・・・わああああああっっっ！！！！！！！！』
「っっっ！！！！？」

その声・・・・・・・・はやて！そうだ、思い出した！俺は・・・・・・・・はやてを守るためにここにいた！

でもなぜ？なぜ思い出せなかった！？そんな俺の脳裏に浮かぶのは・・・・・・・・突然目の前に現れた仮面の・・・・・・・・

「くそっ！！！！」

俺としたことがまんまとやられた！あの連中には全部わかってたのか！俺が一番の障害になることを！
だがな……。

「俺に喧嘩を売るのは、1000年早いんだよ！」

病院を飛び出して、すぐさま右手に魔力を集束を行う。

「千の雷、固定……掌握！！」

「……アヌホモヌヌーヒヌカベ形ユナメネー
————雷天大壮！！」

マギナ・エペレ
闇の魔法による術式兵装、雷天大壮を展開してすぐさま屋上へ向かう。

そしてそこにいたのは。

「……せ、んり……くん……？」

今にも闇の書の中に取り込まれそうなのはやてがいた。

「はやてえ！！」

俺は我を忘れてはやての元へ走り寄り寄ろうとした。が、なにかに弾かれて思い切り吹っ飛ばされる。

「ぐあっ！？」

「ど……どうしたんやろ、わたし……なんや千里くんが光って見えるなあ……」

はやての体には闇の魔力がおおかた取りついている。これを終わらせるにはこいつだ。

「『ループレイカー破戒すべき全ての符』！」

あらゆる魔法・魔術を初期化する最強の対魔術宝具。これを突き立てるべく雷速瞬動ではやてに接近する。

しかし、逡巡が俺を襲った。

これをはやてに突き立てたら確かにはやては助かるだろう。

なら、守護騎士は？こいつを突き立てたら、防衛プログラムである守護騎士もろとも消える。

その未来を・・・はやては受け止められるか？俺だけで、何とかできるのか？

その逡巡が、命取りだった。

「ごめんな・・・私、負けてもった・・・」

強烈な魔力の奔流。そのすさまじさのあまり、俺はまた吹っ飛ばされた。なんとか立ち直した俺は、はやてがいた場所を見た。そこにいたのは・・・。

『防衛プログラム起動・・・目標の排除を開始する』

暴走した祝福の風・・・闇の書の意志がいた。

第8話 クリスマス・イブ（後書き）

作者「知らないところだから・・・原作が原作になってないな・・・」

千里「もはや何も言うまい。というかなんりシリアスだな」

作者「ここの展開が一番書きたかった。けどかなりこじつけ感があるかな」

千里「ああ。非常にこじつけ感があるな」

作者「OTZ」

千里「・・・絶対、守るからな・・・はやて」

作者「loveなのか？」

千里「違っわー!!」

作者「チツ!!」

千里「なんなんだよお前!!」

作者「そうですね・・・そろそろリクエストとかこないかなあ・・・」

千里「一万年と二千年早い」

作者「orz」

千里「さて、こんな奴はほっといて。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。これからも引き続きこのダメ作者の物語にお付き合い下さい」

作者「次回！闇の書に染められたはやての力の前に千里は攻めあぐねる！そこに助け舟を出すのはとフェイト！彼らははやてと闇の書を切り離すことができるのか！？」

第9話 死闘！！祝福の風

「はやて・・・？」

意味がないとわかっている。けど、呼びかけずにはいらなかった。

「も刃も以て、血に染めよ。穿うがて、ブラッディダガー」

が、返事を攻撃魔法で返された。すぐさま雷速瞬動で距離を取って、両手に魔力を集束する。

「――断罪の剣！！」

エンス・エクセクエンス

熱量の相転移による切断・物質の昇華を引き起こす、エヴァンジェリンの十八番。その魔力刃で襲い掛かってくるダガーを切り払っていく。そのまま、雷速瞬動で眼前に迫った。

「だあ！」

左腕を袈裟懸けに振り下ろす。が、闇の書の魔法障壁で完全に防がれる。

「ちっ！無駄に硬くなりやがって！」

ここで、闇の書の意志も構えを取った。クイツクムーブで近づいて蹴りを放って来たけど、雷天大壮を展開した俺にはまず触れられない。

（とはいえ、こっちも攻め手に困ってるんだよな）

あちらは攻撃は当たらない。逆にこちらは攻撃が通じない。本音は、魔法だけで倒したい。宝具……デュランダルなら間違いない。あの障壁は貫ける。けど、あいつに飲み込まれる可能性がある。

「ち…っ、どうしろってんだよ!!」

すると、上空から桜色と黄色の魔力弾がそこらに降り注いだ。まあ闇の書の意味はなんくるないさーと言わんばかりに防いだ。

「大丈夫ですか……って千里くん!？」

「君は……」

「なのは、フェイト！お前らどこに!？」

「それが、よく分からない仮面の人にバインド食らっちゃって……」
「私も、似たようなものだよ」

ああ、アリアとロットにやられたのか。つかあいつらの仮面にはどんな細工があるのやら…本人よりも強い気がする。

「それよりもあれは!？」

「闇の書が強引に覚醒させられたんだよ!!シグナムらもはやてもあんな中だ!!」

「でも君も蒐集を……」

「わけあって協力してたんだよ。なのはにはヒントやったはずなんだけどな」

「え、なのは……聞いてないよ」

「あんなのヒントなんて言わないよ!!」

等と口論していたら、再び魔力の集束を感じる。

闇の書の意思のほうを見遣ると、そいつの頭上にはデアボリックエ
ミッションに相違ない魔力壊があった。
あれが炸裂したらもれなく電車あの世へでGO！ですね分かります。

「ってそんなバカなこと言ってる暇はない！！」

「え、わわっ！？」

「きゃっ！！」

俺はフェイトとなのはのバリアジャケットを引つ掴むと、雷速瞬動
で攻撃範囲外にまで移動した。その直後、黒い魔力塊が爆ぜる。
俺が言うのもなんだが規格外の攻撃力だな・・・こんなのが暴れた
ら普通に地球なんか崩壊するだろうな。

「それで、君が守護騎士じゃないなら・・・手伝ってくれるの？」

「当たり前だ！俺の不注意がなかったら防げたかもしれないんだ・・・
俺がやらなくて誰がやるんだよ！！」

本当にふがいなかった。わかってたのに、そのためにはやての傍に
いたのに・・・こんなことってあるかよ！！

「とにかく、あいつとリインフォース管制人格を切り離さないと。まずはは
やての意識を覚醒させて・・・」

「えっと・・・なんでそんなこと知ってるの？」

「あ？そんなもんお前らが捕まってる間に見抜いたに決まってるだ
ろうが」

実際はアニメを見たから。とはいえ、一応相手の能力・状態をあぶ
りだす魔法ライブラで照らし合わせたけどな。

「えと・・・す、すごいね？」

「お前信用してないだろ」

んなことを言ってる間にあいつは魔力をまた集束してるんだよな。
そう、なのはの十八番の殺人砲撃を。スターライトブレイカー

「あれ、スターライトブレイカー!？」

「嘘!？なのはの魔力を取り込んでるから!？」

「んなことより、周りを見たほうがいいんじゃないか?なんかお前らの友達っぽい反応を見つけたんだけど」

「ええ!？あ、ほんとだアリサちゃんとすずかちゃん!？」

俺はまたなのはとフェイトを抱え、雷速瞬動でアリサらの目の前に移動する。

いきなり目の前にコスプレしたのは&フェイト、そして光る男が現れたら引くどころか幻覚を見たとか思い込むだろうな。

「悲しいけどこいつら、本物なのよねー」

「分かってるわよ!!えーっと・・・」

「ほう、俺の名前は覚えてないと」

「冗談、千里よね?で、このコスプレって何？」

あれ、こいつらそんな冷静だったかな？

「え、驚かないんだ?こんなアイタタタな格好してるのに」

「悪かったね!!」

「いや、なんか驚きすぎて一回転して冷静みたいな・・・ってなわけないでしょ!!説明しなさい!!」

「今はそんなこと言ってる場合じゃないんだよ!後でこいつらに聞け!」

「なんで!？」

ああもついちいち驚くな！！ほら、もつやつこさん発射体制になつてますよ！！

「なのは、フエイト！障壁張って防いでろ！」

「え、でも千里くんは・・・」

「俺はあいつを相殺する！！」

そう言つて俺は飛び上がつて右手に魔力を集束させた。直射系魔法なら、こいつだ！！

「フオア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ。

来たれ深淵の闇、燃え盛る大剣。

闇と影と憎悪と破壊、復讐の大焔。

我を焼け彼を焼け 其はただ焼き尽くす者――

「これを、直射にツ！！」

――インケンディウム・ゲヘナエ奈落の業火！！

焔の魔法、奈落の業火を直線状に放つ。あちらも同じタイミングでスターライトブレイカーを発射した。

桜色の奔流と、地獄の炎はお互いのちょうど中点でぶつかり、すさまじい衝撃波が走った。

「きゃ！！」

「な、なんて衝撃・・・っ」

俺自身もその衝撃波にさらされるのだが、その辺は何とかなった。

けど、この衝撃は気を抜けば吹っ飛ばされそうなほど強い。そのまま、奈落の業火はスターライトブレイカーを打ち負かした。

「……よし」

「す、すごい……スターライトブレイカーを負かしちゃうなんて……」

魔法は術者の魔力と錬度に比例して強くなる。俺の魔力なら、中級魔法でもその辺の大魔法と変わらんだろう。

「さて、なのは、フェイト。アリサとすずかを安全な場所に移してくれないか？」

「え、千里くんは？」

「俺はここであいつを止める」

「そ、そんな無茶だよ！」

「なに言ってるんだよ、今さっきの見たろ？だから心配するな」

「うん……わかった、死なないでね」

そう言っつて、なのはとフェイトはアリサらを抱きかかえてこの空域から離脱した。

「……待ってるよ、はやて。俺が……必ずお前を助けてやる」

そして、俺はその手に呼び出した両端に刃が付いた正宗を握りながら、雷速瞬動を仕掛けた。

「うん、ここでもいいかな」

「そうだね、なのは」

私たちは千里くんに言われたように、アリサちゃんたちを安全なところまで運んできた。アリサちゃんとすずかちゃんはすごく珍しい体験をしたような表情をしていた。

「空を飛んでた・・・本当に、魔法が使えるのね」

「う、うん・・・黙っててごめんね」

「ううん、いいんだよなのはちゃん。なのはちゃんが話さなかったのは理由があるんだよね？」

すずかちゃんは優しい。こんな私たちの姿を見ても、深く入り込んでこようとしない。アリサちゃんは・・・なにかと頭の中で戦ってたけど、やがて決着をつけたみたいで口を開いた。

「それで？アンタ達は千里のところに帰るの？」

「・・・うん」

「千里くんはああ言っていたけど、もしかしたら無理してるかもしれない」

「・・・あなたたちが死ぬかもしれないのに？」

うん・・・分かってる。この戦いが、命を懸けたものだってことぐらい、こんな私でも分かるよ。とつても怖いけど・・・でも。

「ね、フェイトちゃん」

「そうだね、なのは」

「・・・む、また二人だけで分かりあってる」

「ずるいよ、二人とも。私たちにも教えて？」

あはは、ごめんね二人とも。そう心の中で謝って、フェイトちゃんに目くばせした。フェイトちゃんは頷いて、飛行魔法を発動させる。ついで、私もフライヤーフィンを起動させた。

「ま、待ちなさい!!」

「ごめんね、アリサ。だけど……」

私たちは、声をそろえてこう言った。

「友達を助けるのに、理由なんかいらない!!」

私たちは急いだ。はやてちゃんを助けるために一人残った、千里くんの元へ。

「全力、全開!!」

「闇に染まれ、ブラッディダガー」

ディオス・テュコス
「雷の斧!!」

リインフォースのブラッディダガーを雷の斧で一気に切り払う。そして背後に回り込むとマサムネをバトンのようにまわしながら斬りつける。が、それは障壁で防がれ、リインフォースの裏拳が飛んできた。

(背後からも防がれた!! 注視してみてもどこぞの始まりの使徒みたいな曼荼羅みたいな障壁を張ってる様子はない・・・なら、フィールド系の障壁か)

雷速瞬動で躲しながら、冷静に分析する。つか、マサムネで斬れないとか。あの正宗とは違うけど一応異能の刀だぞ。

「・・・魔法の射手・闇の連弾199矢」

つてあれは俺の!! つか本編全然関係ない! なんであいつが・・・

- 回想 -

「あ、そうだ。お前のリンカーコア食べさせせる」

「え? ああ・・・そういえば言ったっけか。つか出し方わからないんだけど」

「・・・」

「なぜそこで可哀想な人を見るような目で見る」

「しょうがないですね。千里くん、私の旅の鏡で取り出しますね」

「・・・申し訳ない」

ああそうでしたね!! 俺の魔力も蒐集してたんですよ!!

なんでめんどくさいところを蒐集してんだよ闇の書。いや、シャマルの旅の鏡か……。

「ってんなこと言ってる場合じゃない!!」

マサムネをバトンのようにまわして魔法の射手を防いだ。とある世界では盗賊刀と揶揄されるこの類の刀の長所なんだよな、この攻防一体の行為ができるのは。

「たかが200くらいで倒せると思っな!!」

対してこちらは五倍の1001の雷の魔法の射手を展開した。そして、目標は全弾リインフォース。

「まだまだ!!戻れ、マサムネ。来い、エクスカリバー・ガラティーン 転輪する勝利の剣」

そして太陽の力の恩恵を受けた聖剣、エクスカリバー・ガラティーン 転輪する勝利の剣を呼び出した。
なんで本家じゃないかって?そりゃエクスカリバーはいろいろな人が握るしさ?

「はああああああ!!」

魔力の集束。そして解放。

「エクスカリバー・ガラティーン 転輪する勝利の剣!!」

剣先から放たれる焔の一撃はリインフォースをいとも簡単に飲み込む。あの焔を受けてまさかなあ……と思ったが、やはり防がれていた。

ここまでやって無理なら、やっぱりデュランダルか？いや、俺が取り込まれたらまず勝ち目がない。なんせ俺の魔法を使うんだ・・・この分なら、千の雷や燃える天空ワラミア・フロウシスを使つてきても不思議じゃない。なんとかできないか。そんなことを考えていたら、上空から桜色の砲撃がリインフォースに直撃した。

「大丈夫、千里くん!？」

「ああ・・・さすが魔王、問答無用だな」

「だから魔王じゃないって!!・・・悪魔とは、ヴィータちゃんの前で認めちゃったけど」

しゅんと、ツインテールと一緒に垂れ下がるのは。こいつのツインテールはあほモキャラのあほ毛と同じ性能を持つてるのか？

「サンダアアア、レイジ!!」

追撃と言わんばかりに雷撃を叩き込むフェイト。ちよつと効いたのか、リインフォースが若干よろけた。

そしてフェイトは俺となのはの元に寄つて来る。

「・・・えぐいな」

「なにを言ってるんですか。あなたのさっきの魔力弾の数のほうが異常です」

「ですよー」。

「・・・見えたのか？」

「まあ、あれだけ浮いていたら・・・ねえ？」

「そうだね、なのは」

ネギとほぼ同じくらいの量を展開したしな。その間に、ユーノとアルフがやってきた。

「なのは！」

「フェイト！ってなんでアンタがここにいるんだい？」

はいはい、睨むなアルフ。

「あれを止めるためだよ」

「ふん、どうだか」

「大丈夫だよ、アルフ。この人も協力してくれるから」

俺が言ったら全然なのに、フェイトの一言で全面信用かよ。泣くぞ畜生。

「そういえば・・・結界張ってるのか？」

「え？」

「え？じゃねえよ。このまま暴れてたらこの街が大惨事だぞ」

「嘘！？」

『嘘じゃないわ。結界がまだ張られてないの』

この声・・・リンディ・ハラウンか。アニメ見てたときも思ったけど若い。

永遠の17歳と言っても十分だませる。

『その君』

「はい」

『この戦いが終わったら、全部話してもらつことになるけど・・・かまわないわね？』

「無論。確認だけど、結界以外は大丈夫なのか？」

『ええ、認識阻害は大丈夫よ。ただ、なのはちゃんの友達についてはもうどうしようもないけど』

「そのへんはなのはとフェイトがなんとかしますので」

なんか視線が痛いけど、気にしない。

「よし、というわけだから手伝えみんな」

「・・・それが人にものを頼む態度かい？」

ほっというてほしい。

「あいつは今危険対象を優先的に攻撃してくる。だからなるべく派手な魔法で人気がないとこまで誘う」

「ど、どうやって？」

「俺がなるべくインファイトで惹きつける。二人は射撃魔法でうまく誘導してくれ」

「ええ？でも君が・・・」

「心配するなっつて」

俺は転輪する勝利の剣を担ぎ直してこうこう言った。

「この剣は勝利を約束してくれるからな。だから、絶対大丈夫だ！」

第9話 死闘！！祝福の風（後書き）

作者「だああああ！！！！もういや！！！！」

千里「どうしたんだ！？」

作者「今日もすごい駄文orz」

千里「さいで」

作者「8話の最後決まったのにな・・・」

千里「まあ、あの切り方は良かったな」

作者「なのにこの9話と来たら・・・」

千里「とはいえ、文章・ストーリーに5をくれた人がいるからよかつたじゃないか」

作者「それはとっても嬉しかったです。誰かは存じませんがありがとうございます。そしてなんか連日PVが1000を超えてるんだけど」

千里「まじか！こんなダメ小説に！？」

作者「うん。一応読んでくれる人がいるし、これからも執筆頑張ります。そしていい作品を作っていくこうと思いますのでどうぞよろしくお願いします」

千里「で、次回は」

作者「とつとと対祝福の風を終わらせる」

千里「すごい投げやり!?!?!?!?!まあいいや、次回も読んでくだされば幸いです」

第10話 Silent Bible

前回までのあらすじ。

俺、眠らされる。闇の書覚醒を止められない。

戦う。リインが超チート。アリサとすずかに魔法がバレるなのフェイ。

リンディさんに事件終了後 O H A N A S H I があるとか言われる。

なのフェイが手伝うから、とりあえず結界張ってないところから広いところにおびき出してリンチしようぜ？みたいな。

で、おびき出した。大成功、やったね

だけれども。

「ねえ、全然攻撃が通らないよ!?!」

「分かってるよ!?!」

今ここ。いろいろ攻撃を加えているが、すべての攻撃をリインフォースに防がれていた。

なんだよあいつの障壁。絶対防御圏イージスかなんかなのか！？

……いや、もしかして防御にすべての魔力を回してる？

だとしたら非常にやっかいだ。

「ねえ、どうするの千里？」

「……まずは、防御を突き崩す」

俺はデュランダルを呼び出す。

え、結局インファイトなのかよ！？とか突っ込むやつもいるだろう。

物理攻撃ってのは遠距離よりも近距離のほうが威力が高い。神蔵魔槍グングニルや大神グングニル宣言みたいな宝具・魔槍ならそういうのは関係なくなってくるけど、同じ攻撃力を至近距離で叩き込むのを比べたら、やはり近距離のほうが強い。

だからこそデュランダル。そして取り込まれる可能性に対しての答えも作っている。

雷天大壮で近づき、そのまま上空へ雷速瞬動。

そしてデュランダルに魔力を通した。

………ちなみに、真名解放ではない。

ただ、近距離がだめなら安全圏ギリギリから斬戟を飛ばせばいいだけの話だ。

「破魔・竜王陣!!」

魔を刈るために編み出された、諏訪に伝わる剣技。

らせん状に放たれた剣戟は、リインフォースの障壁にぶつかって爆発した。

見れば、リインフォースの障壁に少しだけひびが入っている。

「す、すごい……」

「よし、次だ」

リインフォースは沈黙する。そこで、念話が届く。

(管理局の魔導師さん!)

「はやてちゃん!」

(なのはちゃん!? 私、今から管理者権限でプログラムの強制分離を行うから!この子にダメージを負わせてくれる!?)

「はやて!!」

(千里くん!?)

「お前自身は大丈夫なのか!?」

(なんとか!それに・・・大丈夫やのーても絶対やるんや!迷惑かけた分・・・今ここで防衛プログラムを切り離すところ取り返さなきゃ!!!(

「ああ、俺たちに任せとけ」

よし、ここからは俺たちの頑張りがすべてを左右する。けど。

「この障壁なんだよね」

「ああ……」

ユーノの言うとおりだ。この障壁をどうにかしないことには……。
って、うん？あの竜王陣であれだけなら、もうちょい集束した……。

「ユーノ。あの障壁を壊す条件を計算^{弾きだして}してくれ」

「ええ！？……うーん、S+の魔力でバリア貫通か破壊があれば
「じゃあなんで今までの攻撃通らなかつたんだろっ」

「それは単純魔力ないし単純物理攻撃だったからじゃないかな」

付加効果の云々でここまで難易度が変わるのか……。ただの力押しじゃどうにもならないこともあるんだな、としみじみ感じた。そしてまたデュランダルに魔力を通した。

今度は、あの剣戟をもっと圧縮して……。真の一撃必殺に！

「破魔・竜王刃！！」

らせん状の竜王陣とは違って、斬撃を極限まで練りこんだ一対一専用の一撃必殺の剣技。

三日月状のそれはリインフォースのバリアを十分に破壊した。

「くそっ、まだ修復するk「私が行きます！」なのは！？」

なのはのほうを見やると、すでにA・C・S・ドライバーとストライクフレームを起動させていた。

いつでも零距离殺人砲撃へエクセリオンバスターA・C・Sは
いけるよ 的な感じだった。

「でもエクセリオンモードは……」

「大丈夫！私とレイジングハートなら！」

「Yes, My master」

「諦めろ、ユーノ。もうこいつはやる気だぞ」

現時点での突貫力なら、なのはに賭けるしかないだろう。なので、俺はなのはに補助魔法を掛けた。

「なに、これ。力が湧いてくる・・・」

「フェイスと、マイティガード。まあ、攻撃力・瞬発力強化とその後の爆発対策ってところか」

「あ、ありがとう千里くん！」

・・・くっ、そんな満面の笑みを浮かべるな。煩惱にダメージを負わせるな。

とか思っていたら、なのはすでに神風特攻隊ばりのスピードでリインフォースに突っ込んでいく。

「エクセリオオオオン・・・バスタアアアア！！」

ずがああああああああん・・・

直後、大爆発。むろんなのはは吹っ飛ばされたが、ユーノとアルフがキヤッチした。

なのははマイティガードのおかげで無傷。そして向こうは・・・。

リインフォースのいた辺りはなにやら不気味な球体に包まれる。やがてそれは白と黒に分かれ、白いほうには四つの魔法陣が囲むようにして展開した。

『我ら、夜天の主の下に集いし騎士』

『主ある限り、我らの魂尽きる事なし』

『この身に命ある限り、我らは御身の下にあり』

『我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に』

その魔法陣の上に再び、姿を現した4人の守護騎士。

そして各々が誓いをはやてがいるであろう白い球体に立てる。すると、その球体が輝きを増したかと思うと、やがて球体は崩れ去った。

そこにははやて。だが、はやての身を包むのは黒い騎士服に白いジヤケット。

手には剣十字の騎士杖と魔導書。頭には白い帽子。

背には、黒い三対の翼。

今の彼女はもう・・・体にハンデを抱えた女の子じゃない。

「夜天の元に我に集え・・・祝福の風、リインフォース。セット、アップ!!!」

祝福の白い風に愛された、最後の夜天の少女の覚醒であった。

「後は、あれを消すだけやね」

はやてが黒い球体を指さす。

今さっきの戦いで、はやては管制プログラムと防衛プログラムの分離を実行した。

で、白い球体が管制プログラムなので、あっちの黒いのは防衛プログラムなんだろう。

だけど、さっきからずっとなんか渦巻いてるだけだ・・・グロツ。

「おそらく分離されたプログラム同士を結合して、再起動を図ろうとしているんだろう。僕たちは、あれのリンカーコアをアルカンシエルの軌道上に転送すれば勝ちだ」

クロノがきつちりと説明してくれる。きつと一番気苦労してるのにご苦労なことだ。

「でも、さっきの戦いでもかなり手こずったのに・・・なにか対策とかできるの?」

フエイトがつぶやく。その言葉にみんなが若干沈んだ。

クロノは周りをちゃんと見渡せるらしい。なので、一人・・・そう、俺だけみんなと顔色が違うのをすぐに見抜いた。

「おい、君。ここでそんな顔ができるのなら、この状況を打破できる方法を持つてるのか?」

「まあ、100%は保証しないけどある」

「何、それは本当か!??」

「けど、ちょっとお願いがある」
「・・・なんだ」

まあ警戒するか。それはしょうがない。

「クロノ。お前、デュランダルは受け取ったのか？」

「ああ、つてなぜそれを!？」

「うっさい。じゃあグレアムには会ったのか」

「ああ・・・八神はやてのことか？」

「後シグナムらな。こいつらのことを無罪放免にしてくれ」

「・・・それでいいのか？」

「ああ。それが出来るなら」

それをクロノは了承した。なので、俺は作戦を話す。

それを聞いたみんなは驚いた表情をする。

「な？あんがい簡単だろ？」

「確かに簡単だけども・・・」

「すっごく、疲れるね・・・」

俺が提示したのは、バリア毎に相性のいい各々の最強の攻撃を叩き込んでバリアを破壊。その後、無力化。
最後に、なのは、フェイト、はやて、そして俺の4人で攻撃というプラン。

「しかし、ギャンブル性は否めないな」

「理屈上はどうしようもないやつなんだ。それでもどうにもならないなら俺が潰す」

「・・・いっそのこと君が全部やればいいじゃないか」

「それは嫌だ。消滅させても一緒にこの地球が消滅する」
「.....」

闇の書の闇は本当に力の塊だ。あんなのを単騎でどうにかしようなんてのが間違ってる。

「よし、そろそろ位置についてくれ。合図は.....」

「君がやってくれ。僕が考えた作戦じゃないから、考えた人がやるべきだ」

「分かった」

そう言っつて、俺ははやての元に近寄った。
はやつてはいまだ不安な顔をしていた。

「私らに、なんとかできるんやるか.....」

「出来るんかじゃない。やるんだ。大丈夫、俺が付いている」

「.....せやな。千里くんやみんながいるんやから何とかなるな」

やつとはやてが笑う。うん、可愛いね。

さて、そろそろか？とか思っていると、闇の書の闇が覚醒する。

何度見てもグロいな.....FF6のケフカの前のボスみたいだ。

「チエーンバインド!!!」

「ストラグルバインド!!!」

「縛れ、鋼の軛!!!でええりゃあああああ!!!」

ファミリア達のバインドでバリケードを次々と落としていく。やがて、闇の書の闇を覆っていたバリケードはすべて取り除いた。

「先ずはヴィータと高町なのは!!」

「おう!」

「うん!」

名を呼ばれたのはとヴィータはそれぞれカートリッジをロードする。

さて。奴のバリアは4層。外皮から対魔力、対物理、対対流、対熱の複合バリア。なんかこちらの攻撃に対して用意しましたよ感が否めないが、対処は論理上簡単。ただどのバリアもそれに対して強力な防御効果を発揮するだけでほかのものは防御しないわけじゃない。なので、こちらは各自最強の攻撃を行使する必要がある。

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーファイゼン!」

『G i g a n t f o r m』

グラーファイゼンは巨大なハンマーに変形する。あれを見た連中十中八九ゴルディオオンハンマーを想像するんじゃないか?みんなはどうだ?

「轟天、爆砕!ギガント、シュラアアアアクツツ!!!」

そのままアイゼンを振りおろし、バリアを割る。そのまま髪入れずになのがエクセリオンバスターを放つ。

迎撃に闇の書のほうから触手が伸びるが、こいつの問答無用の砲撃にそれは意味をなさない。

そんなわけで、二枚目のバリアを割る。

「次、シグナムとフェイト」

「ああ!」

「はい!」

シグナムは静かに、闇の書を見据える。やがて、剣と鞘を合わせてカートリッジをロード。レヴァンティンは弓になった。

「剣の騎士、シグナム・・・炎の魔剣レヴァンティンの刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

『Borgeren form』

さらにロード。弓の両端に弦が張られ、さらにロードすると矢が形成された。

「翔けよ、隼！」

『Sturm falcken』

放たれる矢。炎を宿したそれはバリアと拮抗していたが、やがて碎く。

そして、バルディッシュザンバー・アサルトを携えたフェイトは自分の体に全く不釣り合いな刀身のそれを振るい、迎撃するバリケードを粉碎する。

そして、魔法陣が展開され、ザンバーを構えた。

「撃ち抜け、雷神！！」

『Jet zamber』

振り下ろされたジェットザンバー。展開時よりもさらに刃は伸び、バリアもろとも闇の書を両断する。

「今だ、はやて！」

「うん！」

最後の締め。はやての詠唱が始まる。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！」

そして闇の書は巨大な石に変わる。が、それも一瞬ですぐに脱皮が始まる。

「クロノ！」

「分かつてる！」

クロノはすぐさまデュランダル・・・杖な？を構えた。

「悠久なる凍土。凍てつく棺の内にて。永遠の眠りを与えよ」

デュランダルから放出される魔力が氷塊に変わり、闇の書の闇に伝っていき海面ごと凍らせた。

「凍てつけ！！」

『Eternal Coffin』

完全に氷結させる。それもすぐさま無に返そうと、闇の書の闇は氷塊を破ろうとしていた。

が、させるかよ！！

ディレイエーミットムヤクラーティオ・フルゴリス
「遅延解放、雷の投擲！！！」

他のみんなが攻撃している間に、詠唱しておいた魔法。一本では心ともないので出せるだけ出した。

それをすべて闇の書の闇に投げ込み、雷の槍で縫い付けた。

「よし、締めだ！4人で、討つ！！」
「くくうん！！！！」

俺たちはそれぞれの位置に付く。そして・・・自分の最高の一撃を叩き込む！！

「全力、全開！！スターライトお・・・」
「雷光一閃！プラズマザンバー・・・」
「響け、終焉の笛！ラグナロク・・・」

そして、俺は。

「双腕解放！右腕固定、雷の投擲。左腕固定、千の雷。術式統合・・・
雷神槍、ティタノクトロン巨神ころし！！いつけええええええええええ！！！！」

ネギの術式統合によるオリジナル魔法、巨神ころし。被害を最小に、かつ最高の攻撃力ならこれだ。

巨神ころしが突き刺さる。同時になのは達の集束砲が炸裂した。

「くくブレイカアアアアアアア！！！！！！」
「解放雷神槍！千雷招来！！！！」
キーリブゾウサウカムトラベーン

もはや小さな国なら完全に再起不能にできるぐらいの魔力の爆発を巻き起こした。

最後は・・・シヤマル！！

「リンカーコア抽出・・・捕ま・・・えた！！！！」
「ユーノ、アルフ！！」

「長距離転送！！！！」

「目標、アースラアルカンシエル射軸上!!!」
「転送!!!」

無事、転送も終了。あとはアルカンシエルに大事がなければ何とかなるだろう。

『目標反応ロスト・・・再生反応、ありません!!!』

エイミイの声で、みんなが安堵の表情を浮かべた。

後は、リインフォースか。はやてらのためにもどうにかしてやりた
いなあ・・・。

「なあ千里くん、さっきの魔法はなんや？」

「ああ、魔法を融合させて新しい魔法を作る術式だよ。この世界と
は違う技術」

「・・・もし、蒐集行使で使えたら教えてな？」

絶対嫌だ。

第10話 Silent Bible (後書き)

千里「かなり早く終わらせたな」

作者「もともとA・Sは完全にプロローグ扱いだから」

千里「ひでえ!!」

作者「まあこんなパツと出の作品に期待してる人いないでしょ・・・」

「

千里「期待してなかったらお気に入り登録してくれる人いないだろ」

作者「そうだね。いつも読んでくれる方に感謝です」

千里「で、いまだ感想とかなないけどこの後どうするんだ?」

作者「一応後日談とそろそろprologueの回収。それにまつわる話を書いてstsの準備。stsについては・・・見たいという人がいたら。どちらにせよ、原作にあった話はあまり書かないでその時期に、千里や千里の仲間はどう行動したかみたいだな?」

千里「原作をそのまま書いてもつまらないしな」

作者「反響がなかったら適当に短編書いて終わり」

千里「でも、話は練ってるんだろ?」

作者「う・・・」

千里「・・・という事なので、読者の方はもうしばらくこの駄作にお付き合い下さい。また、やってほしい話はいつでも申してください」

作者「つか・・・このあたりってどうしてもほかの人とかぶるよね。ところどころはしょると」

千里「・・・そこそお前の腕だろ？」

作者「さーせん!!!!」

千里「まったく・・・」

作者「というわけで。次回はリインフォースの処遇と一応のなのは達のその後。んで、ようやくあの謎のヒロ似の少年が・・・？」

千里「最後に。ここまで読んでくださった方に多大な感謝を。それでは!」

第11話 チートと後日談とリインフォース

さて、闇の書もばつちり葬ったので戦いは一応の収束を迎えた。

結局どうなったかといえば、はやて達には観察処分+管理局入局という事でクロノは手を打ってくれた。

まあはやての体はまだ完治してるわけじゃないので、しばらくは守護騎士が仕事をこなすことになるだろう。

んで、俺への処遇は同じく保護観察処分。ただし能力が能力なので管理局入局が前提だそう。

もちろん、俺は入局する。あの女の命令を遂行するつてもあるけど……… やっぱり、ね？あいつらの事が心配なわけさ。

「それで、入局形式はどうする？嘱託魔導師と正社員とあるが」

「そうだな………ちなみにどう違うんだ？」

「君の世界で例えれば、嘱託魔導師は契約社員。正社員はその名の通り正社員。嘱託魔導師は権限に制限がかかるが、職務負担は少なめだ。逆に正社員は入局に際して士官学校に通う必要があり、職務負担が多くなる場合もあるが、権限の制限がない……まあ一長一短だな。ここで決めても後々また変えられるからあまり気に止めなくても構わない」

「ふむ、じゃあ正式入局にするよ」

「わかった。手続きを取っておこう。………そういえば名前、聞いてなかったな」

「千里。舞阪千里。呼び方は、クロノが呼びやすいようにしてくれ」
「なら、千里と呼ぼう。君、デバイスは？」

「……………え？」

「いや、だからデバイス」

「ないです」

「なッ！？フェイトが言っていた剣はなんなんだ!？」

「ああ、これ？」

そう言っつて、俺は干将・莫耶を呼び出した。

「そう、それだ。君のデバイスではないのか？」

「いんや？あくまで稀少技能で作った剣。名前は…宝具生成」

「稀少技能…。異能の力を持つ武器を任意に呼び出す能力か。まあ、詳細は構わないか。では入局手続きを取るときに登録申請届を出しておこう」

「ああ、サンキユ」

それから、なのはやフェイトらとこれからどうするかを話した。アニメ見て知ってはいたけど、9歳の女の子がこうも未来を見据えているのはとても微笑ましいものだ。

で、皆が気になるリインフォース。

まあこれは……………回想形式で話しますかあ！

説明だるいし。

はやてはあの後魔力エンプティで倒れた。
ライブラで調べても大したものでもなかったので、八神家に帰って
ベッドに寝かせておいた。

その夜。

「よお、リインフォース。優雅に月見か？」

「…ッ!? ああ、千里か。そうだ、月見だ」

「やっぱり平穏だからか？」

「それもあるな。だが……一番は君達の優しさに触れたから、今は
こうして慈しみを持っているのだろっな」

静かに笑顔を浮かべるリインフォース。

元より持っている美しさに月の光が被さって……とても綺麗だっ
た。

と、同時にリインフォースの言葉に引つ掛かりを覚えた。

「今は？」

「ああ、今は、だ。私が居る限り、闇の書はすぐに復活する。だか

ら…明日、高町なのはとフェイト・テスタロッサに頼んで私を消してもらおう」

「……………じゃあ、闇の書のバグが無くなったらそれを取下げてもらえるか？」

「……………出来るのか？」

不安げな表情はそのままに、淡い期待を寄せたリインフォース。

「出来るんじゃない、やるんだよ。…ちょっと額を俺の額に当ててくれ」

「ん、分かったよ」

リインフォースはお互いの額をあらわにさせて、額を引っ付けた。

……………やばい、リインフォースが綺麗過ぎる。

理性で本能を押さえ付けて、俺は術式を発動させた。

「…ライブラ」

知ってると思うが、敵の能力を見破るFFシリーズ皆勤賞の魔法。が、俺はちよいと術式を改造して対象の知りたい情報を確実に把握出来るようにした。

ちなみにアーティファクト『いどのえにつき』みたいな読心はムリ。

……………ん？この澱んだ魔力は？

ああ、これがバグの元か。

「…よし、後はこいつを矯正するだけだ」

「…いや、もういい」

「ああ？」

「私のためにここまでしてくれたのは感謝する。だが……」

「じゃあ、おまえは主を放っておいて自分はサヨナラか？自分の境遇を利用して逃げてるだけじゃないのか？」

「……ッ、それは

「今までずっと苦しんだんだ。だからわがまま言ってもいいんだよ」

「……だが、私はこの力でたくさんの命を奪った。その償いは……」

「生きる。今まで命を奪った分、そいつらの分まで命を輝かせろ」

術式設定……よし、これなら。

「お前の力がどれだけ破壊を呼んだかは俺には解らない。けどな、お前が何をしようが……お前ははやてにとつて大事な存在で、大切な家族なんだよ」

「……だが」

「だが、でも、待ったはなし。それにヴィータあたりに怒鳴られたかないだろ？」

「……」

「……あ、すまん」

「どうした？」

「先に謝っておく」

……はあ、こんな術式じゃないといけないか。

まあいいか。はやてが泣く姿を見ないで済むなら。

「術式、『天使のささやき』」

そう言っただけは……リンフォースの頬に……キスした。

ぎゃあああああ！俺のバカバカ！リンフォースがむっちゃびっくりしてるじゃん！しかもファーストキスがデバイス！？や、美人

だからいいけど！やっぱダメだ！各所から攻撃が来る！！

「……せ、千里？」

「……ごめんなさい。はやくや守護騎士にはチクらないでください」

「いやまあそれは構わないが………」

「それで、身体の調子はどうだ？」

俺は成果をリインフォースに聞いた。

リインフォースはしばらく目を閉じて、なにやら体内に術式をかけていたが。

「……ああ、最高だ」

そうして、リインフォースははやての元に残れるようになった。

同時に、俺は何かを失った気がした。

……とまあこんなわけです。

……リインフォースファンの方ごめんなさい。私は大変なものを盗ん

できました。

とは言え、あの澱んだ魔力が力を生んでいたのは事実で、あれからリインフォースの魔力はA A程度に落ち着いた。ユニゾンは一応出来るらしいが、はやてはリインフォースを戦いに寄越したくないとのこと。

とまあ、回避すべき未来は回避出来た。

後はまあ、士官学校はいい。管理局入局もね。

私生活をやはり忘れていた。

うげえ……………どうしようかな。

なのはらに話を聞いてみるか。

第11話 チートと後日談とリインフォース（後書き）

千里「今回短いな」

作者「うん、今日同期で飲み会したから予定より書けませんでした。期待されていた方、後リインフォースファンの方、申し訳ございません」

千里「……………無茶苦茶恥ずかかったがな」

作者「まあ頑張れ。それではスペシャルサンクス。ドウルジ様、そして活動報告に書かれたkyo様。ありがとうございます」

千里「え、そつちも？」

作者「だって数少ないコメントだし。尊敬する作者様だし」

千里「思えばコレを書きはじめてきつかけがkyo様の二次創作だったな」

作者「アレを読んだ時世界が変わった」

千里「そこまで!？」

作者「まあ眠いからもう次回予告な。書き切れなかった後日談と後八神家の日常でも書く」

千里「あいつは」

作者「後で」

千里「オイ。では、これを読んで下さった方、ありがとうございます。次回もまた読んで下されば幸いです」

第12話 わかっているんだ、この話がこじつけ感マックスなのは

はい、前回からの続きね。

そのことを今からなのは達に話そうとしています。

でもなんだろう・・・すごく嫌な予感があるんですけど、そう、この今なのは達がいるであろうこの部屋。

『だか・・・りくんには・・・』

『で・・・ほ・・・しょう・・・』

『それは・・・』

よし、引き返すか。そう考えたとき、何者かに腕をつかまれた。

「あの・・・どうして俺の腕を拘束するのですか？姉御」

「すまない。主はやての命だ」

俺の腕を掴んだのはシグナム。休憩中だったのか服は武装隊のアンダーだった。

「いやいやいやいや。なんか嫌な予感しかしないんですが」

「大丈夫だ・・・たぶん」

すっごい不安なんですけど。

「なあ。あとで好きなだけ模擬戦してやるから、見逃してくれないか？」

「・・・すまない、お前を連れて行かねば・・・その、主がセーラー服とやらを着させるぞ・・・」

「おおおおい！！！！なにやってんのはやて！！！！？」

リンフォースが言ってたなあ・・・はやてが最近アニメにハマったとかなんとか。きつとそこから悪巧みのネタを引っ張り出してるんだろう。

「とうわけで・・・すまない」

「・・・ああ」

シグナムに免じて、その扉をくぐった。

そこで展開していたのは何やら俺の住むところについてあれこれ言っている三人娘と、額に手を当ててため息をついているクロノが。

「だから千里くんは私の家に住むんや!!」

「だ、ダメだよはやてちゃんばかりずるい!」

「そ、そうだよそんなの・・・千里に迷惑だよ・・・!!」

「そんなことない!千里くんは私らと一緒に住んでたんやからこれからも一緒や!!」

「説明してくれクロノ」

「・・・ああ」

そういうわけでクロノは簡単に説明してくれた。読者の皆様にはわかりやすいように箇条書きにして作者が見せてくれるそうだ。

俺がクロノに家族のこととかそれまでの生活を話す

なのはとフェイトがそれを影から聞いていた

その後クロノとこれからについて話していたはやてに、なのはとフェイトがO H A N A S H I (会話的な意味で)しに突撃。俺

とはやての関係を問い詰める。

はやて「なら千里くんに決めてもらおうやないの!」

俺、はやてに脅されたシグナムに捕まる

俺（。A。） 今ここ

・・・オーケー、事情は理解した。

「で、なんでいちいち俺が呼ばれなきゃいけないんだ」

「だってはやてちゃんばかりずるい」

「・・・（コクコク）」

なのはの言葉にフェイトがすごく肯定の態度を示す。対してはやては。

「そりゃ、私が家族と認めた男の子なんや。いままで暮らしてきたんやから、これからも変わらへん」

「むむむ・・・」

つか俺一人ぐらいでそんなにもm「」どつでもよくない!」「」お前らなんなの!？人の心に土足で踏み込まないで!？」

「いやまあ。俺ははやての家でいいよ。なんか今更クロノやリンデ伊さんに頼つたらなんかダメな雰囲気だろ」

ここで濁したらただの意気地なしだし。それにこれくらいで人生なんか左右しないって。

「ほら、千里くんも私のとこがええんや」

「う、うう〜」

「はやてちゃんのケチ〜」

はやては勝ち誇ったような顔をし、なのはとフェイトは心底負けたような顔をしていた。ほっといたらハンカチを噛んできいー！みたいなことをしそつだ。

「というわけで、これからよろしゅうな？千里くん」

「あ、ああ」

か、可愛い。．．．って誰だよまた小石を投げた奴は！！

でも。ここで引き下がる魔王と死神ではあるまい。なぜなら、俺の第六感がピンピンとコンディションレッドを発令しているのだから。とか思っていたら、こいつらはとんでもないことを言い出した。

「「なら．．．千里くんと一緒に学校行きたい！！」」

「．．．．．はあ！！？」

こいつらなに言い出すんだ！？とか思っていたらクロノが補足してくれた。

「その．．．なんだ。お前が学校まだ学校に通ってないことも筒抜けなんだ。というか．．．話さなければ、僕はきつと病院のベッドだった」

「・・・クロノ、お前も苦労してるんだな」

おいおいおいおい、クロノにも O H A N A S H I するのかよ。俺はアニメのこいつらと現実のこいつらのギャップに頭が付いていけない。

「気になる男の子のことを知りたいのはどんな年齢でも一緒だと思うわよ？それに、お友達と一緒に過ごす時間はこれから一生の宝物になるんだから」

「リンディさん」

「母さ・・・艦長」

声がしたので振り返ると、そこにはアースラの艦長にして、クロノの母親。リンディ・ハラオウン提督がいた。つかほんとに若いな・・・いくつだ？

「いやいや、俺。戸籍とかいろいろないっすよ？俺の家族いないし、少々特殊だったんで」

クロノには超貧乏で放浪生活をしていたという、どこぞの借金執事の設定を引つ張り出した。それを聞いたクロノとリンディさんは静かに涙を浮かべていたという。

「大丈夫よ。お金とかは面倒見てあげるから あと戸籍なんてこっちで勝手に用意するし」

いやいやいやいや、音符マークを語尾につけられても。しかもさらにと黒いところ見せましたよね？

「千里くんと一緒に毎日登校・・・ええなあ・・・」

おいはやて。妄想癖が移ったか？

なんだか怖くなったのでクロノに助けを求めようと……クロノめっちゃ視線そらしてるー！ー！ー！！！！

すぐく助けを求めるな的な雰囲気出しまくってるー！！

「……わかりました。通います」

「「「やったあー！！！！」」」

そうして、また俺は小学校に通うことになった。

「で、いきなりすまないがちょっと頼まれごととしてくれないか」

「頼まれごと？なんだ？」

それから3時間たった現在。俺は問診受けてるはやてと、デバイスの調整のために席を外したフェイトを待つためになのはと休憩していた。そこにクロノがやってきたというわけだ。

「ああ。それが、この第23管理世界に謎の転移した痕跡が発見された」

「管理世界なのに俺たちが？」

「局員が調べたんだが、何も異常を現地で発見できなかったんだ。

それでアースラに回されたんだが……」

「俺の腕試しと初仕事を兼ねてか？」

「ああ。この仕事は現地協力者扱いで受けてもらうから、おとがめ

はないぞ」

そうか。まだリンディさんが書類を作ってる途中なんだな。

「分かった、調べてみるよ」

「千里くんが行くなら、私もついて行っていい？」

「と言ってるんだが」

「分かった。報告しておくよ。場所は・・・分かるな？」

俺はうなずいた。次いでなのはも。

そんなこんなで、俺たちは第23管理世界に行くことになった。

「へえ、なんか地球に似てるね？」

「・・・ここだけ見ればな」

ここは第23世界「フリケード」。端末情報によると、ここは魔法が生活の一部と化している魔法世界だ。

ここ出身の魔導師も多く、魔法学校なるものもあるらしい。

だから、なんか魔物っぽい生き物が普通に謳歌してるし、列車だって銀河鉄道999ばりに空中を走っている。

・・・空中を走るのに石炭とかいるのか？

「まあいいや。とりあえず、魔力反応補足・・・」

俺は、魔力反応を探索する。波長は端末に記録してるので、捉えたらアラームが鳴るはずだ。

『どかんと一発!! 试试看よおーおーおー!!』

「ふえ!?!」

「なんでこの歌なんだよ!!」

誰設定したし!?!... すぐさまアラームを切った。ふむ、ここから10キロ離れた森林地帯か。

「よし、ここから南西に10キロ。行くぞ」

「うん!」

で、問題の場所。ここから魔力反応があるんだけど...

「人っ子一人いないね」

「そうだな...」

目下搜索してけどぜんぜん見つけれなかった。ここが絶対怪しいのに...

「ねえ、千里くんなんかいろんなアイテム出せるんだよね。それでなんとかできないかな?」

「ああ、その手があった。でも宝具出すほどじゃないな... 魔法で姿隠してるなら、魔法で破る」

俺は周辺の座標を設定する。そして、術式設定。

「汝を取り巻く全ての魔。引き裂き、取り去り、浄化せよ。プリフィケーション」

プリフィケーション。FFで例えたらデスペルみたいなもんだ。術式範囲は一番魔力がする範囲半径5メートルを選んだ。そこから一帯に魔力の光が降り注いで、魔力による膜が割れた。

「す……すごいね」

「こんなものは序の口だぜ」

そして改めてそのあたりを目下搜索する。そうすると。

「千里くん、あれ！」

なのはが指差した先には俺らと同じくらいの年の男の子が倒れていた。その服はボロボロで、そいつ自身も傷だらけだった。

「って、ボロボロじゃないか！なのは。治療するぞ！」

「うん！」

すぐさま降下して、そいつの元に駆け寄る。見たところ、どこかの施設のやつなのだろうか？なんか管理局のマーク入ってるし。

「なのは、どうだ？」

「うん……傷はすごいけど、命に別状ないみたい」

「そうか……良かった。なのは、そのまま治療してくれ」

「って、千里くんはやらないの？」

「ちょっと待ってくれ……気になるものが」

俺は男の子の手に握られていたデバイスを見た。それに、俺はライブラを使う。

……ん？非殺傷設定なし？管理局のデバイスの殺傷設定で……。

しかもこの剣の状態レッドゾーンギリギリだし。なにがあった……。

俺は……こいつをよく観察する。

髪の色は黒に近い茶髪。顔立ちはなんかヒイロに近いか……。

そして、そいつがゆっくり目を覚ました。次いで、ゆっくりと俺を見る。

その瞳は……あの女に聞いた特徴に酷似していた。

『青く澄んだ瞳の少年—————』

「千里くん、後ろ!!」

なのはの切羽詰った声。俺は振り向く。そこには1体の魔物がいて、今すぐ攻撃に入ろうとしていた。

やばい、気づくのが遅すぎた。来る前に腰にエクスカリバー携えていてけど抜けるか!?

そう思いながら、本能的に柄に手を掛けようとしたが、手は空を切る。

「!?!」

ない。確かに全て遠き理想郷に収めていたのに!?!すると、少年もいなくなってることに気付いた。まさか……。

「破魔・竜王刃」

ここにいる誰でもない声。その声の主はわかっている。あの少年だ。振り向くと、その魔物を一刀両断した直後のようで、斬られた魔物

は真っ二つに割れた。・・・鮮血が吹かなかつたあたり、概念種だったのかも知れない。
エクスカリバーを手に握ったまま少年は、ゆっくり俺となのはのほうへ振り向いた。いや、なのはは見ていないだろうな。俺だけを見ている。俺は・・・なぜか、視線を外せなかった。

「問おう・・・貴方が、かの異能の少年か」

それが・・・これから苦楽を共にすることになる少年、桜井一騎との出会いだった。

第12話 わかっているんだ、この話がこじつけ感マックスなのは（後書き）

作者「・・・頭悪い展開なのは、どうか気にしないでください」

千里「まあ。ようやく問題の少年だな」

作者「うん、このためだけに書いた」

千里「しかも最後ネタだし」

作者「かつこいいじゃんセイバー」

千里「はぁ・・・で、もう寝るんだろ」

作者「明日も仕事・・・一番正念場orz」

千里「とまあ、作者はけっこう多忙かつストレス溜まる仕事してるので、誤字脱字等は出来るだけ気にしないでください。もちろん、発見次第直しますので」

作者「ふいー、寝る。それではこれを読んでくださった方に多大な感謝を」

千里「次回は、新キャラ桜井一騎についての話だな。それかまた番外編になる・・・かも？」

第13話 お話と急展開は計画的に

- side nanoha -

あの時。辛うじて分かったのは、私が治療していた男の子が千里くんが腰に差していた剣を引き抜いて後ろの魔物に切り掛かったことくらい。

後ろに、魔物が迫っていることなんて全然分からなかったし気配も感じなかった。

そして、その男の子は今…千里くんを見ている。
千里くんも、その男の子を見ている。

見た目は千里くんよりちょっとキリッとしてて大人びた感じがするなあ……でもでも！千里くんは親しみやすいし……ってにゃああああああっ！！私なに考えてるの！？

「……………ああ」

男の子の問い、『貴方は、かの異能の少年か』に対して千里くんは頷いた。

異能ってなんだろう？千里くんの宝具生成かな？

「そうか……………」

そう言って男の子は静かに目を閉じた。
そして、

倒れた。

「え、ちよつと……ええー!？」

さつきまでのなんだったの!?!いきなり電池が切れたロボットみたいに倒れちゃった。

「オイ、大丈夫か!？」

千里くんがいち早く駆け寄って抱き抱え、体の確認を始めた。

「脈拍心拍安定…呼吸も規則的……」

「寝てる…だけ？」

「ああ。多分今まで気を張り詰めていたからじゃないか?人に会っ

たから安心した的な」

「それなら良かった。じゃあどうしよう？基地に連絡する？」

「いや…アースラに連れて帰る」

「え、でも」

「…管理局のマークが入った病院着には、意味があるかもしれない」

その時の千里くんは、何か重大な事件の予感をこの男の子から感じたみたい。

ただつまらなくて逃げ出しただけじゃないかなあ。それじゃあ傷だらけな理由がつかないし……うーん……。

ここはアースラ医務室。

連れ帰った少年をベッドに寝かせて、布団をかけてあげた。

「これで大事には至らないと思うけど、何かあったら連絡くれますか？千里くん」

「分かったよ、シャマル」

怪我の治療はシャマルが全部こなしてくれた。

さすが湖の騎士。

だけど、「引き締まった体だった…／／／」とか言う呟きは記憶から消しておいた。

「それで、この子がいたのか」

「ああ…と言ってもご丁寧に魔法で身を隠していた。ただ、見たところこいつにそういう魔法は使わなさそうだし、多分魔法具使ったんだろな」

「なるほど。だとしても妙な話だな」

クロノは怪訝を浮かべる。

俺も腑に落ちないことはたくさんあるが…。

ひとつはまあ、こいつが管理局に関わりがあるやつだったことが丸分かりなこと。

二つ目はなぜ姿を隠していたか。アースラがこちらの座標特定するまでに、魔力の残滓を調べたらあの結界はやはり魔法具…それもAAクラスのだ。

使い捨てだったのか俺のプリフィケーションが破壊したのかは定かじゃない。確実なのは、こいつが追っ手から逃れるために使用したことだ。

三つ目は、こいつが見付かった時の状況と状態。

こいつは見付かった時、全身傷だらけだった。そして手に握られていた剣型ストレージデバイス。状態はレッドゾーンぎりぎり…つまり今すぐメンテしないとやばいレベルだ。なぜここまでデバイスを酷使したのか……。

「リンディさん、どう思いますか」

「私は、そうねえ。どこかの管理局被れの違法科学者がこの子を改造しようとしてたんじゃないかしら。それを見破ったこの子が逃げ出して、追われたのでは」

「僕も同意見だな……。しかし、君とシャマルが調べて異常が見つからなかったんだらう?」

「ああ。残念ながら」

本当に改造魔導師や人造魔導師なら、何かしらの改造した痕跡が体なり中身なりに現れる。

「……どこいつには見当たらない……ああもうなんでいきなりこんなめんどくさいのをやらなきゃいけないんだ！
とか思っていたら、そいつは目を覚ました。」

「……………んっ……」

すっ、と瞳を開いて起き上がる。そして辺りを見渡した。

「……………ここは」

「時空管理局、次元航行艦アースラの中。僕は本局執務官クロノ・ハラオウン。こちらがアースラ艦長のリンディ・ハラオウン。最後にこちらが民間協力者の舞阪千里。早速で悪いが……こちらの質問に答えてくれないか？」

「分かった」

「では、まず。君の名前と所属を聞こうか」

「時空管理局第23管理世界魔導師見習い：桜井一騎」

少年、桜井一騎はそう告げた。まだ見習いなのかよ、こいつ。の割にはあの圧倒的な爆発力……。

「見習い？ふむ、ではあそこで何をしていたんだ？」

「……分からない。気付いたらああだった。ただ……そうなる前に、俺は、魔物の巣に放られた。そのもう少し前に、白くて長い髪の人に魔法具を渡された」

ああー、やっぱり魔法具だったんだな。……って、白くて長い髪の人？まあA's Striker Sまでの期間は空白だし、ゲームやサウンドステージで語られていても何が起きるか分からないし。

そういう原作には出てこない人々もいるんだろうな。

「なるほどな。では君は任務か何かでの事故…ということか」

「…さあ」

「さあつて。君のことだぞ？」

「あそこには強力な魔物がいるらしい。だからきつと尖兵かなんかなんだろう…俺は」

「強力な魔物？」

「名前は…知らない。あいつらが言うには、不死身らしい」

どこのチートだよ。

どこのセルや魔人ブウだよ。

「分かった。一応、ここで保護という形にするが…、回復したら戻るか？」

「…構わない。きっとあいつらは死んだと思ってる」

「そうか…」

クロノはちょっと聞いてはいけなかったかな的な顔をした。ところでこいつランクどうなんだろ。聞いてみるか。

「なあ、…つてどう呼ぼうか」

「一騎で構わない」

「じゃあ一騎、お前のランクは？」

「入りたてだから、D」

D。つーことは格付け上はもう最弱レベル。

なんだけど、こいつ俺の『約束された勝利の剣』エクスカリバー奪って敵を斬り倒したんだよな。そんな奴が弱いはずないし…なにより、俺が探すの

を頼まれた人だ。なんとかならないものか…。

「リンディさん、こいつをここに異動つてことに出来ませんか？」
「あらいきなり。でも実力がどうあれランクがDならいつでもアースラに入れられるわ。幸いにも、フリケードの方はすでにIMA扱いにしてるみたいだしすぐに移すわね」

リンディさんは快く了承してくれ、すぐさまコンソールを弄り出した。

つかあれからそんな手際よくIMA扱いかよ。いくら反応がないからってそれはないだろ…まさか管理局つてこんなんばっかか？

「…というわけだが、構わないか？桜井一騎」

「問題ない。どうせ消える命だったんだ…あるだけありがたいさ」

こいつもこいつで無茶苦茶ストイックだし。可愛いげないなオイ。

…お前が言うなとか思ったやつは一人ずつ『エスマ・エリシユ天地乖離す開闢の星』だからな。

「ん、異動願受理…と。では、桜井くん。今日から君はアースラ所属になります。異存はありますか？」

「ありません」

「…それでは…ようこそ、アースラへ」

そうして、一騎はアースラに異動となる。

展開がテンポ良すぎだけど、ご都合主義なんだろうな。

「へえー、桜井一騎っていうんだ」

「ねね、好きなこととかある？」

「よしもとは好きか？」

「…助けてくれ、千里」

三人娘の怒涛の質問攻めに、一騎は助けを求める視線を送ってきた。

ちなみになぜ今の状況があるかというところ、あれからクロノが俺にアースラの案内をやってってくれと頼まれて、俺はそういうのはまださっぱりなので三人娘に助けをもらおうと思ったたらこの始末である。

…人間間違えたか。

「はいはい、その辺にしてアースラの中を散歩するぞ」

強引に場を収めて、三人娘＋俺＋一騎というメンバーでアースラ内を散策。まあ空き部屋が多いからかあまりあちこち行くことはなかった。

「うん、これで全部だね」

「だな。サンキュ、三人とも」

「ありがとう、なのは、フェイト、はやて」

丁寧にも、一騎はそれぞれ挨拶した。さらに静かな微笑を称えて。ほら見る、三人とも真っ赤じゃないかよ。

「ええ！？そんな謙遜だよ！」

「せやせや！私ら特別なことしとらへんえ！」

「……………（コクコク）」

フェイト。なんか喋れよ。

まあいいか。こいつも出自がアレなだけで中身は全然普通。俺と比べて差異があるのは性格くらいかな。

元々そういう性格なのか、全体をくまなく見ている指揮官タイプだ。

『千里くんになのはちゃん達、楽しんでる？』

「エイミィさん！どうしたんですか？」

『ん？いや千里くんに用があつてね』

「どうかしたんですか？」

エイミィから？俺何かしたっけ。

『うん、正式に千里くん聖祥転入が決まったからその報告にね』

「そんな。そういうのは後でも構わないのに…」

『でもなのはちゃん達すっごく待ち遠しくしてたし、ね？』

エイミィがそう言うと、三人娘達は急にそわそわしたり明後日の方
向を向いていた。

が、一人だけ狸顔をしていた少女が。こいつ……………また悪巧みを…

…。

「なあなあエイミーさん。一騎くんはあー…どないするん？」

『一騎くん？ああー…まさか、はやてちゃん…』

「うっふっふっふっ……ほらまあ、一騎くんだけ置いてけぼりなんて、可哀相ちゃん？」

やばい、こいつ一騎まで巻き込む気だ。しかも意図を読み取ったなのはとフエイトも急にニコニコします。

「そうだねーはやてちゃん。みんな一緒がいいよね？」

「うん、それがいいよ。エイミー、なんとか出来ない？」

いやいや、そういうのは形式美つてもものがあるでしょ。そんなことだから読者がこの駄作が死ねばいいのにとか思っくんじゃん。当事者の一騎空気だし。

『……どうしましょう、艦長』

『いいんじゃないかしら？一騎くんだって遊びたい盛りのお歳だし。』

じゃあ一騎くん、どうする？」

「……断る空気じゃないですよね」

そうして、俺に続いて一騎までも巻き込まれてしまい。三人娘の通う聖祥に入学することになった。

第13話 お話と急展開は計画的に（後書き）

作者「誰か練炭をお持ちの方は私に譲ってください」

千里「さすがにこれはないだろ……………」

作者「このへんはもう勢いで書いた。べ、別になのはGODでクロノ使ってなのはに13回完全勝利された腹いせしたわけじゃないんだからね!!」

千里「ツンデレキモッ」

作者「orz」

千里「……………まあ、このことはなんとかして受け入れてくだされば幸いです」

作者「とまあ、なのはらの強引頑固ぶりが書けたなと」

千里「もはや天上天下唯我独尊だな、アレは」

作者「しかしここからはしばらくオリジナルストーリーのターン！
マテリアル絡みの話にオリジナルの設定を組み込んでストーリー提供したい所存です！」

千里「ようやく俺も暴れられるのな」

作者「十分暴れてるじゃん。一騎が皆に打ち解けていく過程を書きたいのが一番。（小声で）そしてフラグの乱立しあう…」

第14話 最強の片鱗

「千里くん、朝ですよー」

「ん……あ、おはようシヤマル」

「今日からはやてちゃん共々学校ね。準備はちゃんとしてる?」

「……まあ」

「じゃあ早く着替えて降りてきてね。はやてちゃん待ってるから」

そう言っただけでシヤマルは戸を閉めて階下へ降りていった。

俺はハンガーに掛かった真新しい聖祥の服を手を取った。

……まあ誰もこの状況についていけないよな。だから説明しようと思う。

有り体に言えば学校に通うことになった。そしてその家は今まで通り八神家に住み着くことになった。ただそれだけの話。

ちなみに一騎はフェイトと一緒にやうです。残ったのはとフェイトがじゃんけんしたらフェイトが買ったので、一騎はハラオウン家のお世話に。

……なのは、じゃんけん本当に弱いよな。

ってこつしちゃうおれん。早く下降りなきや。

「さて、今日から新学期なわけなんだけど。今日からこのクラスになんと3人！皆さんと一緒に勉強することになったお友達が来ます！」

「先生！男の子？女の子？」

「両方です。さあどうぞ！」

ガラッと、教室の扉を開く音。

そこから入ってくるのはしっかりとした足取りの茶髪に深い黒の目をした男の子。

若干そわそわしながらその後について来るのは茶髪にショートカットの女の子。

最後に辺りを珍しそうに見渡しながら入ってきたのは黒に近い茶髪に澄んだ青い瞳の男の子。

「それじゃあ、自己紹介してくれるかな？」

「舞阪千里です。ちょっとした事情で急遽転校してきました。これからよろしく」

「八神はやてです。今日からこの学校に復学します。知ってる人も知らない人もこれからよろしくお願いします」

「桜井一騎……………えーと（何言えばいいんだ？）」

「（とりあえずこれからよろしくとでも言っとけ）」

「（分かった）これからよろしくお願いします」

千里くんとはやてちゃんと一騎くんだった。

えへへ、今日から楽しくなりそうだな

- s i d e k a z u k i -

.....

.....

.....

は？俺？

ああそう。うん、桜井一騎だ。ごく一部の読者様は俺の名前は幾度となく見てるだろうけど、それは幻想らしい。それにここの読者様は絶対知らないはずだし。

世間的に冬休みが終わる前に、なのはとフェイトとはやての我が儘一（千里曰く三人娘流話し合い術らしい）で学校に通うことになった俺と千里は、今聖祥っていう学校の小学三年生のクラスに転入した。

..... 待て、俺って学校なんか通ったかな。全然記憶ないし.....。

まあなんとかなるか。
でもなんとかならないのは。

「ねえ、桜井くんはどんなことが好きなの？」

「好きな有名人は？」

「まずはこいつを見てくれ、どう思う？」

このわらわら集まる人々。しかも千里、俺、はやては席が隣同士だから綺麗に囲まれている。

「え、えとえと……」

「俺が好きな有名人はタモリだな。後阿部さんネタを出したやつは表へ出る」

「……有名人？」

千里は普通に捌いていて、はやてはオロオロしてる。というかはやてって順応性高いと思ってたけど、こうまで囲まれたらやっぱり恥ずかしいのかな。

えーでもそんなものとか興味なかったし……訓練に明け暮れさせられたから、娯楽のごも知らない。

……なぜガキのくせにそんなにあっけらかんとしてるかって？さあ……。

「あーもう！この子たち困ってるじゃない！ハイ！質問は一人ずつ！」

とか思っていたら、なんか金髪の女の子が乱入してきて場を仕切りはじめた。

正義感強い子なんだな……勝ち気な瞳だし。

そんなこんなで、質問タイムは滞りなく終わった。

俺は何も答えられなかった。

……地球の娯楽とやらを知らなきゃな。

……

……

……

……また俺かよー。特に何も記載がなかったら千里に視点が戻らんじゃなかったのか？まあいいけど。

それから昼休みになった。今日は給食が休みらしく、弁当を昼ご飯にするらしい。

俺はというと、なのは、フェイト、はやて、千里、そしてさっきの金髪の女の子ともう一人紫の髪の女の子と机を合わせて弁当をついていた。

……みんな弁当か。俺はリンデイさんが包んでくれた手作り弁当。何故かフェイトとお揃いなんだが。

「まあなんにしても、いきなり千里とはやてが転校なんてビックリよ。おまけで男の子一人加えて」

「そうだね。三人とも一緒のクラスつてもビックリ」

「それはリンデイさんが学校に働き掛けてくれたんじゃないかな。友達と同じクラスのほうがいいんじゃないかって」

「そうなんや…リンデイさんにお礼いわななあ」

凄く平和な会話。まあ俺は話し手を見て、適当に相槌打ってるだけなんだけど。

やがて話を持って余した紫の髪の子が俺に話し掛けてきた。

「そっついえば桜井…くん？」

「一騎で大丈夫。えと、君は？」

「私は月村すずかだよ。あっちの金髪の女の子はアリサ・バニングス」

あっちがアリサでこっちがすずかか。覚えた。

「じゃあ一騎くん。一騎くんもやっぱりなのはちゃんの関係者だったり？」

「あ、ああ。管理局の魔導師。ランクは低いけど」

「けどこいつ強いぜ。でかい魔物を一刀両断！」

「一刀両断！？ごっついなあ！」

はやてが尊敬の眼差しで俺を見てきた。いや、そんな目で見られても…。

「ふーん…なんかなのはが新しく作る友達って…凄すぎない？」
「こいつが魔王だからな」
「あはは、私らドラクエでゆったら悪魔神官とかそんななんやな」
「じゃあああああ！私魔王じゃないよ！はやてちゃんも茶化さないの！」

千里はよくなのはを魔王魔王と言い、なのはは凄く否定する。
曰く、「敵を問答無用の砲撃魔法で昏倒させてから事情聴取」。
曰く、「気に入らない者にはとりあえず拘束して砲撃魔法」。
……こんな可愛い女の子がそんなことするのか？にわかには……
…信じれるかも。

「もう！千里くんは！」

「あっはっはっ！……ん？ああ、クロノ」

どうやらクロノから念話が入ったようだ。千里はふむふむと話を聞きだした。

「ねえ、なんなのアレ」

何も知らないアリサが千里を指差しながら言う。

「あれはねアリサちゃん、念話っていつてテレパシーっていつのと
同じやつなんだよ」

「テレパシーって…魔法凄いわね」

一般人からしたら最早驚愕を通り越して引くわな……。でも驚愕で終わってる辺りこいつら大物かも。

「で、どうしたんだ千里？」

「ああ、なんか俺の魔力測定とあと一騎のデバイスだとかなんとか俺の？ああー…、あの時引つつかんでいた剣のデバイスはもう使えないだろうし。多分既存のストレージを宛がわれるか。」

……………そんなことを考えていた時期が、俺にもあった。

- s i d e s e n r i -

おおい！やつと俺かよ！
まあいいけど。

まあとりあえず俺と千里はアースラに来ていた。何故かって？俺の魔力測定と一騎の新しいデバイスの受け渡し。そのデバイスを作った人が非常に優秀らしいから、俺もついでに頼んでみようと思う。
あ、そうだ…一騎の素質をライブラで見ておこうかな。

エイミィに言われるままに測定してからしばらくヒマだったので、

一騎を呼び寄せた。

「うん、どうした？」

「ああ、ちよっと動かないでくれよ」

「？ああ」

そう言つて一騎はソファーに座り込んだ。

よし、術式ライブラ。

えーと、魔力総量は…AAAか。ランクDで実質AAAとか知ればどの部隊も喉から手が出るくらい欲しがるぞ。

しかも空戦適性ありか…。

んで魔力運用効率…オーバーSS!?

どんだけだよ！三人娘よりも上とか…。あ、でも剣使っしそういう点では妥当かもしれない。

最後に…変換資質と稀少技能。前者は雷と微量で炎。稀少技能は…
…なんじゃこりゃ？

「集束…斬戟？」

「集束斬戟…俺の稀少技能、らしい。俺にはよく分からない。って俺の能力探つてたのか？」

「ああ。悪いなこんなことして」

「いいさ。ランクに合わない能力を持つてるのは分かつてる」

しかし…本人が分からないとか。集束斬戟っつーから、なのはの集束砲の斬戟版みたいな？

後なんか武器を選ばない能力があつたな。騎士は徒手にて死せず持ナイトオブオーナーちなのか。

「……………」

ガチャリと、扉が開いてクロノとエイミィと後もう一人が入ってくる。何処かしらクロノとエイミィは放心してるようにも見える。

「どうしたんだ？クロノ。えらい疲れてるようにも見えるけど」

「…………… 貴様はバグか？」

「はあ？」

「これを見たほうが早いと思うよ」

そう言つて書類を見せてきたので、俺と一騎はその書類に目を通す。そこには……………

魔力総量：EX

空戦適性：EX

魔力運用効率：EX

魔力放出量：EX

…………… EX？

「EXはSSS+以上の力…………… あるいは、SSSと呼ばれる能力以上の活躍をした者の栄光とか…………… 定義は曖昧だけど、君の場合には値が計測不能だったんだよ」

「つまり、君は。しっかりと研鑽さえ積みれば管理局最強はたやすい

ということだ」

「「はあ!!!?」」

……この時、改めて俺が与えられた力を実感した。全くこんな力持たせて一体何をさせたいんだか。

「ああそれと、一騎。君に暫定的にデバイスを支給しておこう」

クロノが気を取り直して、もう一人の女性が一步前に出た。見た目はハヤテのマリアさんの感じで、白衣を纏っている。

「技術局のセリス・ローレックです。これからよろしくお願いいたしますわ」

セリスさんは抱えていた布に包まれた長い何かを一騎に手渡した。
一騎はその布を取り払う。そこには柄に銀細工の竜があしらわれた一本の長刀。

「剣型ストレージデバイス、銀竜。昔気まぐれに作ったはいいいけど、クセのある剣で誰も扱えなかった問題児ですわ。ああ心配なく……性能はその辺のインテリジェントデバイスよりも優秀ですわ」

一騎は銀竜をまじまじと見る。やがて柄に手をかけて一息に引き抜いた。

そして刃紋を眺めてから、刀を納めた。

「……ああ、悪くない」

「それは何よりですわ。また専用が出来ましたら、そちらを」
「解った」

一騎は銀竜を待機状態に戻す。銀竜は淡い光に包まれて、銀色の腕輪になり、一騎の右腕に装着された。

俺もそのうちデバイスを用意しなきゃだろう。せっかくだからセリスさんに頼んでみるか。

「セリスさん」

「はい？ああ、舞阪くん？君もデバイスを？」

「はい、いずれは持たなきゃいけないですから」

「そうですね…武器を自由に使える能力がおありですから、舞阪くんにはユニゾンデバイスが宜しいのでは？」

「ユニゾン？はやてみたいなのか」

「ええ。融合騎は使い手を非常に選びますが、その分パフォーマンスは抜群。あなたみたいな能力であれば、十分すぎるパートナーが出来ると思いますわ」

「ユニゾンか……うん、いいな。そうするよ」

「では、最速達でお造りしますわ」

そうして、俺はユニゾンデバイスを作ることになる。
それが新たなカオスと呼ぶとも知らずに……。

第14話 最強の片鱗（後書き）

作者「はい、第14話でした。二人とも素晴らしいリア充っぷりだな」

千里「テメエのせいだろ!？」

一騎「リア…充？」

作者「一騎が天然…だと…!？」

千里「お前一騎に何仕込む気だ!？今凄い不穏な空気を感じたんだが!？」

作者「うっさい。ときに一騎、ハラウン家ではどんな感じで生活してる?」

一騎「どつって…普通に一緒にご飯食べた?」

作者「フェイトと寝たりするの?」

一騎「…一緒に寝ないと、寒いだろ?」

作者「リア充超新星爆発しろ。しかも千里は美女にも囲まれやがって」

千里「望んでそうなったわけじゃねーよ!」

作者「さて、感想感謝コーナー行くぞ。感染爆発様ありがとうございます」

います」

千里「こんな作品でも感想くれるなんてどんだけ心優しい読者なんだ…大事にしるよ？」

作者「もちろん。この作品を極力駄作にしないよう努めて参りますので」

千里「しかし…俺と一騎の能力差激しくない？片やチート片や真面目って」

作者「お前は集束斬戟を知らないからな……」

一騎「そんなに危険…なのか？集束斬戟……」

作者「まあその威力は次回見せよう。その次回は模擬戦！そして新たな事件の影が迫る！」

一騎「ここまで読んでくれた人には大感謝。また次回も読んでくれたら、嬉しい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9916z/>

魔法少女リリカルなのはRewrite

2012年1月14日01時45分発行